
『T』と『F』の魔法理論

中ノ晁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『T』と『F』の魔法理論

【Nコード】

N4356Q

【作者名】

中ノ晁

【あらすじ】

広大なビゴン砂漠の中央に在る魔法学園都市。ここでは多くの優秀な若者たちが魔法の原理を習得するため、勉学に勤しんでいる。物語は入学式に起きた事件を皮切りに、この学園に秘められた謎が存在感を増してゆく。『失踪する天才たち』『正体不明の二代目校長』『13人の教官の不審死』そして『記憶の無い少女』 真理を求めた者を待つのは全知全能への鍵か、もしくは破滅か。

消えたスピーチ原稿

『真理に至る道は木に似ている。探究の仮定は枝分かれし、その先に未熟な真実が実を結ぶ。人が在る限り木は成長を続けるだろう。だがそれは即ち時の存在が真理を拒むことを示す。』

ならば不死の観測者を創ることさえ出来れば、それ自身が木となることは可能であろう』

ヒツギガフチ
— 棺ヶ淵 無明 ムミヨウ

そばだった丘の頂上にある大講堂には壁が無い。平坦な石畳の土台の上にはアーチ型の天井と、それを支える幾何学模様に配列された巨大な石柱群があるばかりである。故に、吹き曝しの大講堂からはこの学園都市を囲む果て無きビゴン砂漠が、その熱で揺らめく遙かな地平線までもが全方面に展望出来た。

西の空に浮かぶ太陽は未だ衰えることなく、重圧に似た熱線を辺り一帯に散らしている。

学園都市内の建造物のほとんどはかつてここに栄えた旧王都の遺跡をそのまま学校施設へ転用したものである。円形に広がる都市の中央に構えた神殿型の王宮は主要校舎に、高級市街の建物は魔法実験のための専門施設や学生用の商店街となっている。

この中で、大講堂と旧市街地にある学生寮だけは例外的に新たに造られた建物であることを知る生徒は少ない。開校の時分、入学する生徒の数が予想より多かったことで、新たな施設の増設が必要であったのかもしれない。しかれど『新たに増設』とはいっても、この学校が出来たのは今から二世紀も昔のことであるからして先の『新

たに』という表現には少し語弊があるのかも知れない。ただ、どの建物も総じて堅牢なグアメラ石材を用いた黒っぽいレンガによって造られているため、その建物の年代は専門家でない限りは見分けがつかないのである。古代を思わせる雰囲気や壊さなかった初代校長の心配りがこの学園都市の象徴を現在まで守り通しているといえる。

大講堂の祭壇に立つた女生徒は六百名の入学生代表としてスピーチをする名誉を与えられた栄光に、白い頬をほのかに紅潮させている。彼女はこの一瞬を確信へ変えようとするかのように華奢な体を一回り膨らませる程大きく息を吸い込んだ。腰まである黒くて艶やかな長髪がサラリと空中に靡く。香木の焚いた微かな香が散った。

「―はあっ」

一杯に吸い込んだ息をすべて吐いても、彼女の夢が覚めることはなかった。この魔法学校に来るため、日々勉強にいそしんだ彼女の努力を否定するものは何もない。女生徒はついに現実となったこの光景を、消えないように改めてシツカリと目に焼き付けるのだった。眼下に並ぶ生徒たちの期待に満ちた面々と、歴史ある砂上の学園都市と、この学園の歴史を背負う大講堂をである。

「ではMs・北条。スピーチの準備は出来ているかな」

壮年の紳士らしい教官が『北条』と呼んだその女生徒を促す。北条はジッと賢明そうな瞳に緊張と興奮の色を浮かべていたが、コクンと喉を鳴らすと一転、その口からはとても落ち着いた声色が発せられた。

「はい。でもその前に、^{カサジ}傘路教官…これを預かっていて頂けませんか」

言って教官の方へ、麻紐で纏められた数枚の原稿用紙を手渡した。
傘路教官は一寸だけ不審な顔をしてそれを受け取った。用紙のマス
目には整然と書き連ねられた文字が清流の如く延々とそこに留まっ
ている。

「これは…スピーチの原稿じゃないのか。必要無いのかね？」

「ええ。入学を屋敷で待っている時に綴ったものより、現実にレジ
ナルド学園の一員となった私の今の心境を、そのまま生徒の皆さん
へお伝えしたいのです」

北条の真剣で、それでいて柔らかい言葉に傘路は心中とても感心し
ていた。流石にこの学園へ成績トップで入学しただけのことはある
らしい、と。傘路は理解ある微笑みを浮かべて、原稿用紙を懷に収
める。

「君が良いと思うのなら、そうすべきだ。己の意志に従うことこ
そが魔力の根源である。Ms・北条、君はきつと優秀な魔女に成れ
る素質を持っている。己の信念を突き通したまえ。これは私個人か
らの餞だ」
はなむけ

傘路はそう言い残して祭壇の後ろへ退場する。教官の制服である
漆黒のローブは影の中に傘路の輪郭を一瞬で消し去った。すると北
条は今まで話していた傘路という男が幻影だったのではないだろう
かと疑いたくなるような、魔法にかけられた気分になる。傘路には
印象というものが希薄であった。例えるならそれは、目をつむった
時に感じる瞼の裏の色に似ている。黒かったように思えるが、そう
でないようにも思える。そんな感じであった。

さて傘路は闇の向こうでもう別のことに目を向けているのか、いや

若しくはまだ彼女をジツと眺めているのか。気丈で真面目な性格の北条は、あれほど柔和そうな紳士に底知れぬ恐怖を感じてしまう自分を叱った。

息をすうつと吸って気を取り直す。真新しい紺のスカートを翻し石の教壇へ歩み寄り、その一步手前で六百人へ丁寧にお辞儀をした。生徒たちの好機に満ちた眼差しが一斉に彼女へ向けられる。

「はじめまして、私は北条ホウジョウ 窓霞と申します。この度は入学生代表として、僭越ながら御挨拶をさせて頂くことになりました」

頭を上げて、スピーチを始める彼女の顔へは男女問わずに生徒たちからの羨望の眼差しが寄せられる。前列の男子生徒が隣の男子に上気した雰囲気話しかけていた。チラチラと北条を見ていることから、話題はやはり彼女だろう。美女というニュアンスでは無い、言うなれば北条は『見目麗しい』。閑散と天へ一筋伸びる竹のような、飾らぬ凜とした美しさがある。評議する男子生徒の一人が、老成した俳人のように「乙なもんだ」と呟いた。

その男子の後ろにいる女生徒はその目に憧れと嫉妬が入り混じった複雑そうな顔をしている。才色兼備はフィクションと高を括つていたらしいがその防波堤はあっさり破れた。

また女生徒から左に流れた所にいる…端麗な顔立ちの男子生徒が不図、北条の目にとまった。

整然としていて、美男であるといっても差し支えない面構えであるが、これといって特別に目立つ所はない。しかし、妙に引つかかる所があった。無表情のままに、北条のスピーチを聞いている。どこが『妙』なのだろうか、北条は頭の片隅にそんなことを想いながらスピーチを続けていた。

― 見覚えがある…？ それも最近の筈だ。

その男子生徒は未だ何の表情も浮かべぬまま、涼やかな目元に退屈さを滲ませている。北条は少しムツとして、スピーチに熱を入れよ

うとした、その時――

北条の背後、祭壇の後ろにある隔ての石壁が閃光と共に爆発四散した。土埃と飛んだ瓦礫が辺りを覆う。

一瞬の間を開けて、生徒たちの悲鳴が大講堂を占める。

「北条くん、大丈夫ツ!?」

眼鏡をかけた女性教官が、恐怖に座り込む北条のもとへ駆け寄る。

「だ、大丈夫です」

「良かった。でも一体何が……!? あつ、傘路教官が中に」

女性教官が慌てて爆発のあった方へ走る。既に祭壇の裏には数人の教官が杖を持って踏み込んでいる。逃げまどう生徒達も教官の先導で講堂から避難していた。

北条は一人怯えるように自分の肩を抱いた。

「――駄目だ、死んでいます……!」

踏み込んだ教官の一人が絶望的な声を上げたのが聴こえた。

北条は震える膝でよろよろと立ち上がり、煙の中をソツと覗き見る。壊れたテーブルの残骸と瓦礫の中に、仰向けに倒れている人の姿がある。

――それはやはり、カサジ　ハウスウ傘路　鳳雛であつた。

傘路の腹には大きな穴が空き、黒いローブは焼け千切れていた。手には折れた杖を握り締めて、最後の抵抗を思わせる気迫のままにそ

れは終わっている。

「あ…あ…！ やあっ…！」

北条は力なく崩れ落ちる。

「北条くん、一旦寮へ戻りましょう」

先ほどの女性教官が駆け足に現れて北条の脇を支え腰を立たせた。北条は乱れた髪もそのままに、教官に連れられて行く。さっきまで普通に話していた人が、数分後にただの肉片と化している。まだ16の少女には大きすぎる衝撃であつた。

混乱した脳は現実を直視せずに、その周囲の記憶を考察するという。このとき北条の頭にも傘路の死体より別のことが次々に交錯していった。

入学式は、授業は、生活は、安全は…

―傘路教官に預けた、私のスピーチの原稿用紙は何処へ行ったのかしら

錯綜する北条の頭に突拍子も無くそんなことが過ぎつたが、それを深く考えるまでもなく意識はブラックアウトした。

北条はこのまま気を失い、ようやく医務室で目を覚ましたのはこの翌日のことであつた。

黄金麦の月

歴史と伝統あるレジナルド魔法学園は男女共学とは名ばかりに、数少ない科目を除いてほとんどの授業が男女別に行われる。加えて、その生活圏も細々と区別されている為、青春盛りの生徒たちには苦痛の日々が強いられることになっていた。ただ歴史と物理の示すように、抑圧には反発という作用が付きまとう。青臭いやら生臭いやらの若き義憤に駆られたその心の内には、異性の校舎や学生寮は秘密の花園と映るのである。前述後述関わらずに『秘密』とさえ付けくのであれば何としても、何をしてでも知りたくなるというのが、若きに限らず死に遅れにすらも働く大衆心理というものだ。こういった所、耳がさとい生徒にはとりわけ『風の噂』が重要な情報源となっていた。

そういうもので最近の噂の中でも花咲く話題と云えば、『美少女新入生、九頭竜^{クスリユウ}教会^{オシエ}』『魔法教官殺人事件の犯人』『簡単に合格できる選択教科』そして、『男女合同授業の科目』である。いずれも聞くに値しない位に俗っぽいものが多いものの、若者の好奇心をくすぐるには十分であった。これらの情報もとい噂についてどのくらいの知識を持っているのかは、一種のステータスとして扱われる傾向があり、その筋で自身の地位を高めようとする生徒は東奔西走してでも噂を集めようと必死になっていた。

ただし、噂を必死で集める人物の全てがこれに当てはまるものではない…。ここにいる髪色の明るいい好青年などもそれを示すよい例であった。

「逆崎。俺たちの友情に見込んでの頼みがあるだが、きつとお前なら快諾してくれると信じて…」

「断るよ」

「おいそりやないぜ。同じ釜の飯を食った仲じゃないか」

「僕の釜の飯『も』食ったと言うのが正確なんじゃないかな？」

「あれは俺が悪かったさ！ 今度『白銀亭』で飯奢るからよ」

「冗談だよ、何も気にしていない。で、僕に頼みつてのはなんだい？」

「それがよー、聞いてくれよ。俺さ、噂で聞いたんだが」

そう言つて、逆崎^{サカサキ リユウ}理由に爽やかな笑みを向けながらすり寄つて来るのは四万十^{シマント ヒキユウ} 匪躬という男子生徒である。二人は共に今年この学園へ入学したばかりであつたが、寮の部屋が同じということで付き合いは自然多かつた。逆崎は落ち着いた雰囲気をする如何にも真面目といった風貌だが、それと対照的に四万十は遊び人らしい性格が端々からにじみ出ている。

「『信仰薬学』って授業があるだろ？ あれ実は女の子と合同授業らしいじゃないか」

「そつえば四万十はその授業を取つてなかつたつけ」

「おうよ、俺は将校進学だからな。そんな薬だのなんだのの授業なんて無用の長物さ、と思つていた時期が俺にもありました」

「で？」

逆崎は興味なさそうに相槌を打つ。一方で四万十は逆にどんどん話

を盛り上げている、というよりは勝手に盛り上がっている。傍から見ればこの二人の会話が全く噛み合っていないように見えるのだが、その実、彼らの相性はそれほど悪くも無いようだった。

「理由は確かその授業取ってたよな？ 頼む！ 授業を一回だけでいいから、俺と変わってくれないか？」

「いいよ」

逆崎は一つ返事で即答してしまった。まるでどんな頼み事もそのまま快諾してしまうであろう勢いである。単純な四万十はもちろん、大手を振って喜んだ。なにせ、最近話題の九頭竜 教会も、その授業を取っているからである。

「ありがとうっ、親友！ 感謝するぜ」

「じゃあ僕はその時間、四万十の受けている授業に出ればいいんだね？」

「おう、俺が受けてんのは『自然魔法基礎』だ。西館の5階、天秤の間でやってるから」

「じゃあ健闘を祈るよ」

「お前もな。じゃあ、俺明日の授業に備えて商店街で良い香水買って来るよ」

四万十は弾かれたように勢いよく、それまで腰かけていた石段から飛び出し、最後にもう一度だけ逆崎に「ホントにありがとうなー」と言って去っていった。神殿の遺跡には逆崎一人が残された。

かつて神殿として使われていたこの建物は、現在生徒たちが昼をゆつくりと過ごすための避暑地の役割を担っている。

砂漠の太陽はジリジリ鋭く、特に正午時などの屋外は流れる汗も干乾びる暑さである。魔法によって涼しく保たれた建物の中から出ることと叶わない。そういった時、ここは旧王宮の校舎の固く苦しさからも、日照りの暑さからも逃れられる絶好のスポットであった。

神殿内部は迷宮のように入り組んでいるものの、神殿内には地下水脈が組み上げられ、水の行き交う水路が張り巡らされている。古代信教に必要不可欠であった『聖水』の供給源がこの神殿にあったというの名残であろう。聖水から来る天然の冷気は魔法によって得られる冷感より、どこか柔らかいものがあつたというのも、生徒に人気の理由の一つかもしれない。

それに何と言っても、神殿は男子生徒も女子生徒も区別なく同様に利用できる。ここはまさに生徒たちの天国と言ってよかった。

「あら、あなたって確か…逆崎くんですわよね？」

「いかにも僕は逆崎 理由その人だけど」

「私のこと覚えてないかしら？ 『信仰薬学』で逆崎くんの隣の席よ」

苔むした石段に腰かける逆崎の右脇から歩いてきた女生徒達が逆崎の前で立ち止った。

声をかけて来たのは、なんと最近話題の九頭竜 教会である。ジパネスク人には珍しい銀髪の少女で、柔らかく逆巻いた髪の手は肩から豊満な胸にかけて螺旋階段のように垂れている。そしてとりわけ

目立つのはその目鼻立ちである。男女問わずに惹きつけられそうなアーモンド型の目は朝霧のような静けさを湛え、何時見ても凜々しい。西欧人の血を彷彿とさせるような顔立ちに、鼻筋の通った小さな突起があどけない。確かに彼女が学園一の美少女であることを疑う者はいなかった。

どうやら逆崎の前に女生徒がたむろう事になったのは、九頭竜が立ち止ったから他の女生徒も立ち止ったという金魚のフンの連鎖反応らしいかった。

「九頭竜さんだね、覚えてるよ。で、僕に何か用でもあったの？」

逆崎は声の調子を変えずに訊く。先ほどの四万十と話している時と全く同じ口調であった。

「ちょっと、教会ちゃんに話しかけられておいて『何か用』ってありえない？」

「格好付けてんじゃないのかしら」

九頭竜の取り巻きが逆崎を冷やかし半分に囃し立てた。

言い忘れていたが、ここレジナルド魔法学園では伝統的に男女間の仲が非常に悪い。何故だか、殆どどの学年も対立構造といえば男女の間であった。もちろん、隠れて密かに交際をする者もいるが。

さてこの一年生の間にも、すでに伝統が伝わり始めていたようである。

「別に用ってほどもありませんわ。ただ、あなたと一緒に授業を受けてたから話しかけてあげただけよ」

「ああ、そうなんだ。―で、僕は君に話しかけて『貰ったんだ』ね。じゃあ、一応礼を言っておくべきなのかな？　ありがとう」

「―あ。あら、いやですわ。私そんな風に見えていたかしら？」

「そう見られたからといって、その責任が君にあるわけじゃないよ。それは見た側の責任だ」

「そ、そう？　じゃあ、また今度の授業で会うのを楽しみにしてますわね」

やきもきしたように、九頭竜は踵を返した。取巻きの女子もそれに従って逆崎に背を向ける。砂漠地域でも快適に過ごせるよう、通気性と遮光性に富んだ女生徒の制服がヒラリと風に膨らんだ。九頭竜の丈の短いスカートの奥にある、フリルの付いたショーツの濃いピンクと黒の色彩が逆崎の目に飛び込んだ。逆崎は一度まばたきして、フツと目を背ける。

「あいつ根暗そうだよね」

「なんだかんだ言っても、裏じゃきつと他の男子と変わんないんじゃない？」

「ダメよ、勝手に人のこと言っちゃ。逆崎くんはちよつと変わっているだけなのよ、きつとね…」

九頭竜は取巻きを軽く諫めつつ、キツと鋭い視線を後方の逆崎へ送った。

逆崎と話してはいつもの自分が保てない。というより、逆崎が

己のペースを乱さない。これはプライドの高い彼女にとって許せるものではなかった。

これまで彼女は関わった男をすべて意のままに蹂躪して来た。例外はない、いや彼女のプライドが例外を許さないのだ。これまでも、そして彼女の性格が変化しなければ…これからもそれは変わらないのである。

—今に見てなさい、すぐにこの男も私の踏み台にしてみせるわ、九頭竜は密かに己の心に誓った。

何を隠そうこの驕り高き御令嬢は元より逆崎を籠絡せんがために話しかけたのである。『信仰薬学』の授業を受ける男子生徒34人の半分以上はすでに彼女の手中に在る。逆崎は順番巡って早一カ月、ついに稀代の女傑に目をつけられたと云う訳である。

「逆崎くん、また明日の授業で」

遠くから手を振る九頭竜。逆崎もそれに答えてフラフラと手を振る。

その時、逆崎は四万十との約束を思い出し、『またね』と言った九頭竜の思惑が全く外れることに気が付いた。

「あ、九頭竜さん。次の授業は僕…ってもう行ってしまった。……まあ、いいか」

逆崎は無関心そうな声でそう呟くと、神殿の風穴から砂漠を見下ろした。今日も変わらず、蜃気楼の浮かぶ砂丘の地平線は幻想的である。

一つの二重螺旋はここより始まり…

四万十は医療魔薬店『牡丹』の引き戸を後ろ手にボタンと閉めた。「またいらっしやいねエ」と、中から甘ったるいしゃがれ声が四万十に追いつがる。四万十は形の良い眉を極限まで寄せて不快な顔を露わにした。この男が憂いに目を伏せると、長い睫毛が一層際立つ。

「つたく、とんだ色呆け婆だぜ…」

やれやれと、茶髪のを搔きながら四万十は呟く。香水の入った紫色の瓶を太陽に透かし見た。見る人によつては爽やかな、見る人によつては軽薄そうな四万十の顔に香水瓶の色が映った。値段を5割引きする代わりに店の高齢の女主人と接吻を交わす契約を熟考の末に断り、4回払いのローンを組んでまで手に入れた香水である。

この学園都市内の店では異性の気を引く目的で使用される香水は取り扱われていない。『学生の本分は勉学である』という校訓ゆえに、都市内で特別に商売させてもらっている店では中々そういったものを表沙汰にして売れないというのが主な理由であった。

―ただ、この説明からも分かるように店は『表沙汰して』売れない…つまり娯楽品は在る所には在るということになる。

この点、牡丹はいわゆる『在る所』である。

牡丹は多種多様な薬草と共に、香水を精神安定薬として店に置いていた。もちろん取り扱い扱いは極秘裏になるので香水にはそれなりの値段がついている。だがそれでも頻繁に入荷や売り切れがあるのを見ると、需要は少なくないらしい。

「これで香り良し、服装良し、顔良し、（笑いの）センス良し、だ」

四万十は綺麗な白い歯を覗かせにんまり笑って、上機嫌に下らない演劇じみたステップを踏んだ。もしここに逆崎がいれば「君はまだ頭が悪そうだ」と言っただろうが、彼は今神殿で九頭竜のスカートの中を見ているところである。

「あ・と・は、明日に備えて早めに寝るだけっさア」

四万十が学生寮に向けて歩きだしたその時、前から走ってきた生徒と勢いよくぶつかった。

「あだッ」

「うげッ」

ちなみに悲鳴は「あだッ」の方が四万十である。

ぶつかったはずみに、香水入れの瓶が四万十の手をゆっくり滑り落ちていく。

―カシャン…

と儚い音をたてて小瓶が割れ、砂漠の砂に魅惑的な香りが浸み込んでいく。四万十は慌てて香水をすくうが、手に残ったのは良い香りのする湿った泥である。

「う、嘘だろあ！！ これじゃあ俺には服装と顔と笑いのセンスしか残ってねエじゃねえかつ！！」

「それとまだ4回払いのローンも残ってるじゃない」

「そうだったそうだった。まだローンが…、ってテメーこの！！」

四万十はぶつかった相手を恨みがましい目で見やる。が、そこにはもう人がいない。驚いてもっと先を見れば、走って路地を曲がる女生徒の後ろ姿があった。

「あて逃げか、あの野郎め！ 弁償しろーっ！！」

手に残る砂を投げ捨てて四万十はその後を追う。が、二、三歩行った所でその足が止まった。

「あれ？　そういうや、なんであいつは俺のローンを知ってたんだ」

四万十は首を傾げはしなかったが、代わりに逆崎のように眉をひそめてそう呟いた。自分が逆崎に影響を与えているとしても、まさ逆に影響受けているとは思わない四万十は、逆崎に負けず劣らず考え事が長い。ただしそれは思慮が深いからというよりは、情報処理能力が低いかららしい。恐らく二つ以上の事象を関連付けようとした日には高熱を出して生死の境をさまようだろう。

「店の前で立ち聞きでもしてたのか…？」

しかしそんなことを立ち止って考えるより、あの生徒を捕まえて直接話を聞いてみれば分かることである。と、行動主義の四万十はようやく思い至った。

「一石二鳥とはまさにこれだな」

諺の使いどころが若干おかしいが、今それを指摘する人は周りにいない。

彼は露店のテントが並ぶ街道をがむしゃらに走って逃げた生徒を追った。本来この男は考えを巡らせるより、何も考えずに飛んでいく方が得意なのだ。が、その有利にすら気付かないのが、彼の致命的な鈍感さであった。

「待てエ、こらッ！」

四万十の形相に、道にいる通行人たちが驚いて道を譲る。

「なんだアイツ…？」

「さ、さあ」

走り去る四万十の背中が小さくなるの見届けてから通行人が顔を見合わせた。

「当て逃げでもされたんじゃないかな？　んで、それがすつごい美少女だったんだよ」

「は？」

通行人が疑問符を顔に張り付けながら振り返ると、そこに細身の少女が腰に手をあて立っていた。

彼女が四万十に追われていたはずの女生徒であつたとはつゆ知らぬ彼らは、彼女を奇妙な眼で見るより他無い。

童顔の少女はその眼差しさえ透かしてしまう位の清純さで、悪戯っぽくクスクス笑った。

彼女は…、次のエピソードで彼女の正体が明らかになるが、せめて名前くらいはここに記しておく。

ドウメキ カツカ
―百笑 迦日

今年レジナルドに入学したばかりの、正真正銘の１年生である。これは誓って確かなことである。

…ただし、百笑が正真正銘の『生徒』であるとは言っていないのも、誓って確かなことである。

一つの二重螺旋はここより始まり…（後書き）

早い段階で読んで頂いていた方には申し訳なかったのですが、割り込み投稿という形でこのエピソードを挿入しました。

これまでの話を省みた時、何だか場面の移り変わりが早すぎる感があつたからです。

その勢いを緩和するため、四万十の話を入れたのをどうかご容赦ください。

王国軍特務探査隊の二人

「―北条窓霞は未だ精神的外傷から立ち直れずに、家族でさえ面会拒絶だというがね。どうやらその実態は違うらしい」

「…んで？」

四万十と百笑が街角で衝突する、少し前のことである。

学園都市内に数ある遺跡のうち、とりわけ人気のない地区にある、とりわけ目立たない廃屋に彼らはいた。砂漠の砂があっけらかんとした部屋の隅に小さな砂丘をつくっている。

「これは保健医のDr・眼鏡橋の診断書だ」

青年の方が、ファイルに入った一枚の紙をもう一人に手渡した。受け取った少女はその紙に目を通す。

「『事件時に誰よりも現場の近くに居たため、事件の一部始終を目撃。その後ショックによりパニックや不眠等の症状が見られる』。…んでんで？」

「この診断書の内容と文字の残留思念を照合してみた。すると驚いたことに、この診断書には幾つかの嘘が存在することが分かった」

そうして、男は声を一層潜めた。

「北条窓霞が嚴重に隔離されている本当の理由は『無意識洗脳術』を解除するためらしい。言ってしまうえば証拠隠滅だな」

「北条ちゃん洗脳されてたんだ、可哀想に……。んで。あの手の魔法は『痕』が残るから厄介なのよね。んでんで？ 他に分かったのは？」

「まだ調査中……。だ。傘路鳳雛の死と北条窓霞の洗脳は繋がっている可能性が高い。何者かが北条に魔法をかけて傘路を殺した……。というのが俺の推理だ。そしてこの件にDr.眼鏡橋が何らかの形で関与しているのは間違いないだろうな。百笑^{ドウメキ}、お前はと思う？」

「まだ何とも言えない。一か月で仮説を立てようだなんて焦り過ぎよ、^{クシキ}馘先輩っ」

「先輩はやめろと言ったろうが。王国軍に入隊したのは百笑の方が先だ」

「でも先にこの学園に潜入させられたのは馘じゃないのよ」

「ええい、どつちでもいいからその先輩って呼び方は『学生』の時にしる。同年の奴に言われると何だか……」

「ゾクゾクする？」

「ーしない」

馘と呼ばれた青年は廃屋の2階の、枠だけになった窓から沙漠に目を凝らした。まるでそこにある真実を必死で見つけようとするようだった。

「……この事件は恐らく、表沙汰にはならないだろう。ここは王国の

誇るべき知性の揺り籠だ。レジナルドは国際的にも名高い。その優秀さは他の国のそれを凌駕している。これを貶めることは国王も、学園長も望まないだろう。しかし尊厳の為のベールは時として、腐敗を隠す黒幕になる。だからこそ、秘密裏にこういった事案を調査する自浄作用が、俺たちが必要なんだよ」

「説明御苦労さまです、先輩。んで、こんなに秘密事項をべらべらと喋って大丈夫なんですか先輩」

「近くに誰か居たらお前の落ち度だろう。何の為の『広域知覚術』だ」

先輩と呼ばれたことに顔をしかめながら馘は言う。百笑はウィンクしながらチロツと舌を出して「ちげえねエな、へへへっ」と開き直った。

「はア。どうしてコイツが相棒なんだ…。人事部の新手の嫌がらせか」

馘は額に手を当て首を振る。彼の若さでこの動作が随分と板についている所、色々と苦勞也多いらしい。

その時、百笑が急に真剣な顔で馘の口に手を当てた。

「な、なにを…!!」

「シッ…。誰か居る」

馘がギョツとして辺りに目をやる。が、周囲に人の気配は無い。百笑の拡張された知覚網にのみ何者かの存在が認められたらしい。彼女はジツと耳を澄ますように、うつむき加減で目を閉じた。

「これはたぶん、砂漠の西の方だね…」

「なんだ、脅かすな。情報漏えいさせてしまったかと思ったじゃないか。…しかし、砂漠に誰がいるのか？　ここはビゴン砂漠のど真ん中だぞ」

「―まだ学園の人間は彼女に気付いてないみたいだわ。一寸私が行って拾って来る」

「おいおい、大丈夫なのか？」

「ちゃんと私が世話するから」

「―ペットか」

「二人で行くのはマズイから馘は寮に戻ってて。んで、調査の報告は私がやっておいてあげるから」

「了解。じゃあ、またな」

「うん、またね」

背の高い馘の頭がひび割れた石の階段の下に消えていく。それを見送ってから、百笑は馘とは逆の方向から、つまり枠だけの窓を飛び降りて2階から地面にふわりと着地した。その過程で制服のスカートがめくり返るが、その下には短パンを穿いていた為に肝心のものは全く見えない。

「颯爽と風のように、ね」

黒目がちで猫のように丸い目を太陽に輝かせて、ツンと尖った鼻をひくつかせる。これがいわゆる諜報員らしい、周囲を詮索するプロの癖なのかどうかは分からない。本人もそんなことは考えたことすらないだろう。

そして百笑はスラリと長い健脚で砂を踏みしめ、乾いた遺跡の街道を走っていった。

この後に、彼女は丁度『牡丹』から出てきた四万十と衝突することになる。

それは恐らく少女・百笑の『未知の遭難者』への好奇心が本来は用心深い王国軍少佐・百笑の注意力を上回ったからだろう。

百笑の流儀

「待てエ、こらッ！」

四万十の形相に、道にいる通行人たちが驚いて道を譲る。既に街道には四万十とぶつかつた女生徒の姿はない。四万十は周囲に鋭く目をやりながら、真つすぐに道を走っていった。

なけなしの（四万十にはそう思える）仕送りの中で、ローンを組んでまで手に入れた香水を買ってからものの数分で土に還したのだ。喜怒哀樂の激しい彼に何らかの自制を求めるのは難しい。

「なんだアイツ…？」

「さ、さあ」

走り去る四万十の背中が小さくなるの見届けてから通行人が顔を見合わせた。その時、背後から気の抜けた声が出た。その口調は『ふやけた』という表現がしつくりくる。

「当て逃げでもされたんじゃないかな？　んで、それがすつこい美少女だったんだよ」

「は？」

彼らが振り返ると、後ろに女生徒が…百笑^{ドウメキ} 迦日^{カッカ}が満面の笑みで立っているのだった。通行人AとBは何を言うでもなく、また互いに顔を見合わせた。鏡に合わせたように彼らは得心のいかぬ神妙な顔をしている。

「でも、カワイイは正義よね。だからあの男の人もきつと許して

くれると思っの」

「…え??」

「おっと、こんなことしてる場合じゃなかったっけ。はやくあの子を迎えに行かなくっちゃ」

啞然とする二人を残し、百笑はまた西の方へ走り出した。あつと言う間に（通行人A、Bは「あつ」すら言えなかったが）百笑の姿は小さくなる。

四万十と百笑の香水のくんだり、ましてや追跡逃亡の関係すら知らない傍観者たちには、一体何の事だかさっぱり分からないのだから思考停止も無理は無い。

彼女の姿が見えなくなった頃にようやく、Bが口を開いた。

「不思議ちゃんだけど…、ちょっと好みだったかなア」

「ーマジで!? 俺は無理だな。ああいうタイプは彼女にすると疲れし、男に依存すると見たぜ。しかも外見だってちょっと子供っぽ過ぎねエか?」

「それが逆に良いじゃねーか。依存万歳! 外見だってさらさらの黒髪、それがショートカットと来たもんだ。タマンナインッ」

「いやあ、外見だって九頭竜さんの銀髪の方がいいって。胸大きいし」

「いや、あの子みたいな真っ平らな胸にこそ顔をうずめる価値があるんだっ。流行に流されちゃいかんよ君。手の平で覆い尽くせるく

らしい小さな胸……。未熟な胸骨の上に薄っすら広がる柔らかさ。これでも分らないのか！？想像してごらんよ……。地平線も見渡せるような平たんで『柔らか』な大地。そこに2つ、恥ずかしそうにツンと尖るピンク色の――

言いかけた時、彼らに声が掛る。鳥肌の立つくらい恐ろしく温和な口調であった。ウツと二人は息を飲む。

「――ちよつと失礼い？ 『平たんな胸』：言ったのはどつちかな？」

突然の大声に二人が驚いて目をやると、そこには先ほど走っていった筈の百笑が腰に手を当て仁王立ちしていた。太陽を背にして立っているので、百笑の顔にある笑みには暗い影ができている。

「ひいいッ！ な、なんでもないんです」

「俺は悪くないけどすいません！ ってか、何で聞こえてたんだ！？」

その答えは明解、百笑の得意分野『広域知覚術』という魔法の効力である。五感の受容体を周囲の空間へ拡張し、情報を脳内に展開するという諜報員には必要不可欠の魔法である。

その知覚可能範囲は半径5？、訓練しただいでは10？まで広がると言われているが、百笑の場合は13？であった。百笑はよく、ドヤ顔で「13キロやあ」と誠に自慢していた。

「んで、正直に『アレ』を言った方を指さしたら、一人は許してあげる」

通行人AとBは迷うこと無くお互いを指差し合った。もはや裏切り

応酬すら頭にないようである。

百笑が微笑む。

「――蜘蛛の糸は切れた、よ……」

百笑が手を振り上げた。と同時に、恐怖に目を見開く二人は地面に沈み込むように倒れ伏した。

『+0』

高位の軍人ならば必ず使えなければならぬ魔法である。名の通り、これはあらゆる数値に0を足す。今百笑がやってのけたのについて言えば、彼女はターゲットにかかっている重力に0を足したのである。

分かりやすくいえば、もしターゲットの体重が65kgだとする。そこに0を付け足すと『650』kg、つまり十倍の負荷がかかることになる。凡人ではとても立っていられるものではない。

――と言えども、魔法はあくまで『+0』。そう、実質的には体重も何も変化していないのだ。言ってしまうえば、これは表記上に0を付け足しただけである。

絶対的な質量の操作ではなく、表面的な質量の操作することで現実を変化させる。

これがいわゆる『F』に分類される虚偽魔法である。

「ふう。本当なら0を3つくらい足してあげたかったけど、今日は時間が無いから許してあげる」。もう、忙しい時はどうしてこうも忙しいのかしらん」

口から泡を吹き、倒れている二人へばやく様に呟き、再び走り去る。今度こそ、百笑がここへ戻って来ることはなかった。

この後、百笑は砂漠で少女見つけ保護するのだが、その話はしばらく後に語ることしよう。『遭難少女』が話の中に登場するのはまだ先の事なのだ。見つけた場面もその然るときに語ることになるだろう。しかし、どうか心の内にこの『点』を記しておいて貰いたい。線を結ぶには二つの点が、形を描くには無数の点が必要なから…。

四万十 匪躬と云ふ男

物語を進めるに当たって、まず四万十匪躬のついて話しておかなければならない。彼の生い立ちを語るのはそのまま、この国や学園の実情を語ることもなるからだ。

四万十匪躬は王都『セコイア』のとある高級武官の邸宅で生を受けた。彼の母親は産後が悪かったために一週間昏睡し、そのまま息を引き取っている。にも関わらず、である。四万十匪躬は母親の顔を、特に微笑んでいる母の顔を鮮明に思い浮かべることが出来るのだった。

父、四万十 創玄は匪躬を自分のような軍人に仕立てようと苦心していた。どうにかして放蕩三昧の息子进行レジナルドへ送り込み、しっかりとした教育を受けさせなければならぬ。

それは母親のいない息子を、その性質故にはあったものの、少し甘やかしが過ぎたという反省の意味も込めてであった。良く言えば大びつるげで屈託の無い人間には育ったものの、人としてまだ幼いままなのである。

恐らく『甘やかされ育った』事は匪躬本人も感じていたのだろう、中等学校を卒業する頃になって突然、これまで憤然と反抗していた父の方針を、まったくそのまま丸呑みにしてレジナルド魔法学園への進学を決めたのだった。

「匪躬。四万十家の男児たるもの、二言は許さんぞ」

「そんな事をわざわざ確認するのか、親父」

晚餐を見守る屋敷の使用人たちの顔に、一斉に安堵と歓喜の色が広まった。創玄も釣られて笑いそうになったのを、慌てて渋面と決め

こむ。

「軍人二笑ミハ不要ナリ」と訓示して以来、隊内で『鉄仮面將軍』の異名を持つ創玄。言ってしまった部下達の手前、こんなことで破顔する訳にもいかない。

「—よいか、勉学に励めよ」

「…ああ」

「その、なんだ。お前は俺の子だ。くれぐれも『女遊び』は程度をわきまえるのだぞ」

「ああ」

「……お前への教訓も兼ねてこの際に言っておくが、お前には4つ下の妹がいる」

「ああ。 —ああ!？」

「レジナルドは名門校であるから、きつと貴族の御曹司や姫君がおるだろう。いいか、くれぐれも気を付けるんだぞ？ でないと俺の様に…、うむ…ま、まあいい。兎に角気を付けるのだぞ。分かったな？」

「えっ。一寸待て、妹ってのは何だよ？ ちょ、おい何処行くんだ親父!」

……
……

元来、創玄という人間は男として、又父親としても匪躬が拒絶をできる程、性根の悪い人間であるという訳では無かったのだろう。いよいよ決断を迫られると、匪躬は父親を心配させることが出来なかったのだ。

レジナルド魔法学園は貴族や軍人、裕福な商人などの子息がほとんどを占める。ある意味でここは出世の登竜門であるのだ。上を志すのであれば、『レジナルド王立魔法学園出身』の肩書は必ず後に響いてくる。一方で、この学園には王国の脆弱な体制を表す一面も見られる。

実際のところ、確かにレジナルドは王立の教育機関ではあるのだが、その位置付は平等とは言えない。というのも、権力者を親に持つ子供については金やコネ次第で入学試験が免除される場合もあるのだ。王族の子息、つまり王子や姫君なども数人この学園に通っているのだが、彼らの優遇は勿論のこと、それこそ身分の高い生徒の犯罪的な所業さえ、ある程度は黙認されていた。

そしてそれが昂然と行われていることに、ほとんどの国民は無関心であったのもここに述べておく。貴族と民衆の間にある溝を埋めようとする者もいないのだ。近年、ある高名な魔法学者は『対立構造が未発達理由は、民衆を王家に服従させる古の魔法が未だ効力を持っている為である』という論文発表をしている。

話は戻り、実は四万十もこの裏口、いや『特別入学』によってレジナルドに入っていた。ここに通う生徒の三割はこの特別入学なのだから、それはもはや裏口入学とは言えないだろう。

学園の表門にあたる、試験による入学は四万十の学力、魔力では極めて難しいものだった。レジナルド魔法学園は国内最難関学校である。それも勉学を疎かに入学した『三割』を補って余りある『七割』の人間達が全国……いや、王国と友好関係のある遠方の国々からも続々と集まっているのだ。生半可な力でこの試験を通り抜けることは

できない。

四万十とは違い、逆崎の場合は試験を突破して入学してきたところ、彼の身分はそれほど高くないのかもしれない。もちろん、貴族の中でも高潔な者は試験を突破し入学している。北条窓霞はその一人である。彼女ほどではないものの、逆崎も普通の若者とは比べ物にならない程、優秀な生徒であるらしかった。

四万十と逆崎が初めて顔を合わせたのは前代未聞の入学式の後、教官らによつて生徒たちは慌ただしく寮の部屋に押し込められた後のことだった。四万十が部屋に入ると、そこには独り窓の外を眺める逆崎の姿があった。あんな事件が起こったばかりだと言うのに、彼にはいささかも興奮している様子がなかった。どころか、その涼しげな眼元には退屈の色さえ浮かんでいたのだった。

「何を見てるんだ？」

四万十が軽い口調で逆崎に話しかけた。逆崎が気軽に話せるように、というよりは四万十自身がリラックスするためにこの口調で話しかけるようであった。

「見ようとして見ている訳ではないんだけど、目に見えているものを訊かれているのだとしたら僕は今、地平線を眺めていると言うより他にないよ」

酷く回りくどい言い方で答える逆崎に、四万十は好奇の目を輝かせた。人間好きの四万十には逆崎の不自然さが実に魅力的に見えていた。

「ふーん。なんだか良く分からねーけど、お前は『さっきの事』が

気にならないのかよ？」

「『さつきの事』…？ 入学式で起きた爆発の事かい」

四万十は当たり前だ、と言わんばかりに大きく頷く。その後へ付け加えるように「勿論、北条さんの清楚キヤラは本物か、という議論もあるかも知れんがそれは後回しだ」と言った。

「聞いた所によると教官が一人死んだらしいぜ。おおよそ、あれは魔法による爆発だろうな…。水素が酸素を凝縮して、爆発を『起こした』んだ」

「そう…。じゃあ、あれは殺人事件なんだ。でもそうすると、あの爆発音、威力、精密性を見ると犯人はかなりの使い手だね」

「ああ。まさにピンポイント。軍人なら中尉レベルだ。しかもそのまま、まんまと誰にも見つからずに逃げ果せたとなると…高度な透過幻覚か、瞬間移転も使えるやつだな。ともなると中尉どころか少佐相当だな」

すると逆崎は眉をしかめて、落ち着いた声でもう一つの可能性を提案した。

「あるいは、時限式の術式を教官に仕掛けていたか、もしくはその死んだ教官が自分で自分に魔法を放ったか…だね」

「ハッ、そんな馬鹿な。まあ時限式の魔法はあったかもしれないけどよ、自殺はないだろ。あ…さてよ。教官は事前に魔法で洗脳されて、入学式に自殺するように仕向けた…？ これも無い話じゃないが…可能性は低いってもんじゃねエな。でも、どうして入学式だ

「つたんだ」

「…分からないよ。いや、そもそも僕らに分かることなんて何一つ無いんだよ」

四万十は少し面食らったような気がして、自分に対して無性に腹が立った。自分がとても詰まらない話題に夢中になっていたような気になったからである。とつさに次ぐ言葉を探すが、なかなかそれが見つからない。閑散とした居間にギクシャクした沈黙が横たわる。逆崎が再び窓の外へ視線を移そうとした。

それを遮るかのように、つい四万十はこれまでより大きな声を出す。ここで会話が終われば自分の沽券に関わるとでも言うようだった。だがそんな気負いの割に四万十の口調は軽やかである。

どこか気の抜けた話し方なのに、そこには若者らしい澁刺とした人の良さが滲み出ているのだ。

「—いいや、分かることだってあるぜ。四万十 匪躬だ、これで俺の名前が分かったろ？ これから1年間同じ部屋で暮らす同居人の名前だよ。1年間っていうのは、俺が二年生になったら単身寮に移るつもりだからだ。学園の決まりとは言え、男が共同生活なんてむさ苦しくて我慢ならねえよ、全く。とにかく暫くの間、よろしくな。ちなみにお前の名前はなんて言うんだ？ 別に男の名前にや興味無いけどよ、特別に聞いてやろう」

四万十は芝居がかった尊大な態度を、身ぶり手ぶりを交えて演じて見せた。

逆崎はしばしの間、呆けたように四万十の顔を眺めていたが、逆崎のその顔に四万十が嘖き出しそうになる寸前でようやく一言、こう言った。

「四十君か。：分からないな君は。僕なんかとこんなに辛抱強く話してくれた人は初めてだよ。―ああ、：僕は逆崎。逆崎 理由という名前らしい。理由は分からないけどね」

信仰薬学

「その、四万十君…でしたわよね。そこは逆崎君の席よ…？ 多分あなた教室を間違えているんじゃないかしら」

「いいや、間違えじゃないさ。逆崎と授業を代わってもらったんだ、俺が頼んでね」

九頭竜の隣の椅子にドンと腰かけて、糊の効いたズボンで足を組んでいる男子生徒は言うまでも無く四万十であった。

「どうしてそんな事を？」

九頭竜は小首を傾げて不思議そうな顔で訊いたが、その実、心の中では『どうせ私目当てだろう』と確信していた。確かにその直感は正しいのだが…。

「もちろん、そうしたのは君にお目通り叶いたかったからさ。天使がこんなにも近くに居るというのに、それを拝まずにいるのはそれだけで地獄送り級の罪だぜ。ところで俺も教会ちゃんと同じくセコイアの生まれでさ、学校は違ったけど噂はちゃんと聞いてたんだぜ。『セコイアに難攻不落の教会あり』だとかな」

「もう、知らぬ間に変な噂が広がっちゃうのは困りものだわ。―にしてもよ、四万十君。駄目じゃない、授業を勝手に抜け出しちゃ」

九頭竜はツンケンした態度で四万十に臨んだ。この手の男は少々手荒な態度で接しないと離れていかないことは経験上分かっているのである。

「こんな可愛い子を困らすなんて俺も罪だなア。けど大丈夫、逆崎も快諾して席を譲ってくれたんだ。誰にもバレやしないさ」

「え、逆崎君が快諾…？　—ふーん、そうなんだ…。というか、私は別にあなたの心配をしてるわけじゃないんですからね」

胸の内の動揺を見透かされぬよう、九頭竜は後半の言葉をわざと強調して言った。ただし、彼女は自分も知らぬ間にギリリと親指の爪を噛んでいたのだった。まる逆崎に酷く侮辱されたような怒りが、九頭竜の胸にこびり付いた。

『教官が来たら、この四万十とかいう男と逆崎が授業を代わっていと知らしてやろうかしら』

そんな九頭竜の心の動きにまったく気付かず喋繰る四万十は、よもや九頭竜が腹いせまがいこんな事を考えているとは思う筈も無い。性善説の上に楽天的観測をドバツとふりかけると四万十の人間観が出来上がるのだ。

そんな時に、ようやく『信仰薬学』の教壇の上に人が現れた。授業の開始時刻はすでに過ぎてている。教室に集まった生徒達もざわめき始めていた所であった。

この教科の担当は保健医も兼ねる眼鏡橋 メガネバシ ニシキ 日紫喜という20代後半の男だった。

—が、今日教壇に立っているのは普段とは異なる女性の教官である。何事かと、60人の生徒が座る広い教室の所どころから、囁くようにして訝しげな声が上がった。

しばらくの間、登場した壮齡の女性教官は生徒たちの声がまったく耳に入らないかのように黙々と手元の教材を整理していたが、教室

内のざわつきが静まってきた頃にようやく口を開いた。
コッテリとした紅色の唇の隙間から、抑揚の無い極めて事務的な言葉が発せられる。

「皆さんおはようございます。今日はDr・眼鏡橋から体調が優れないという連絡がありました訳でして、緊急に私が授業を代行するということになりました、ええ」

それだけ言うと、教官は再び手元の書類に目を落とす。肉付きのよい10本の指が紙を掻き分け急かしくなく動き続けているのを見ると、眼鏡橋の病欠の知らせは余程急なことであつたのが窺える。

「―はは、医者か風邪ひいちゃザマ無いな」

その時、屈託の無い笑い声が教室内に響いた。確かにその言葉の内容は皮肉であつたのに、それにはまるで悪意というものが欠けている。こんな風に喋ることが出来る男は、もちろん四万十匪躬を除いて居ない。臨時教官が僅かに、そのぐんずりした瞳を生徒の間に走らせた。

「ちょ、ちょっと…！ そんなに大声で言ったらあなたのことがバレちゃうじゃない…！」

九頭竜はほんの少し前まで自分が教官に密告しようとしていたのも忘れて、四万十の耳元で怒鳴った。

「おっと、そうだった。すっかり忘れてたぜ」

「忘れてたって…。もう少し考えて行動なさいよ」

「よく言われるよ。しかし俺はいつも、ほとんど反射で生きてるよ
うなもんだからなア」

「アンタ脳味噌要らないじゃない。と九頭竜は言いそうになって口
をつぐんだ。」

「―ところで、四万十君は逆崎君とどういう仲なの？」

聞こえるか聞こえないか位の、小さな声で訊く。

「んゝ、強いて言うなら同居人かな」

「それは強いて言わなくても同居人じゃない。…それで彼はどんな
人なの？」

「どんな人って…。普段は無口で、たまに口を開けば、訳の分かり
そうで分からない事を言うやつさ。根は良い奴なんだけどな」

四万十は何か遠い過去を思い出すように語った。

「やっぱり逆崎君も変な人なんだ」

「まあな。って、逆崎君もって事は俺も変な奴だと思っ
てないか？」

「あ、いえ。違うの、ただの言葉のあや。気にしないで」

九頭竜は目を半月にして笑ってみせると、四万十も綺麗な歯を見せ
て笑った。

「―簡単な男。」

「ん、何か言ったかい」

「やっと授業が始まるわよ、静かになさい。せっかくDr. 眼鏡橋が休みで、あなたのことがバレずに済みそうなのに、騒ぎ過ぎて追い出されたら元も子もないじゃない」

「なる程、一理ある。教会ちゃんは頭がいいなア」

「…。」

―『信仰薬学史』の23ページを開きなさい。今日は眼鏡橋教官がいらっしやらないので、実技演習は次回にします、ええ。では……皆さん知つての通り、信仰薬学の歴史は古く、太古においてはその効力は絶対的なものとされていました。しかし、中世に入ると人々の間に唯物論的脱宗教思想が広まり、信仰薬学ならびに虚偽魔法の多くが前時代的な遺物とされてしまいました。それがどうして、今となって再びこれらの魔術が復権したか。分かる人はいますか？

―はい。

―貴女、お名前は？

―キンマ コリマ 帰島 幾許です。先ほどの質問に解答してもいいですか？

―ええ、どうぞ。

―虚偽魔法の復権は、棺ヶ淵 無明の解明した真理の形状による所が大きいと言われています。『真理が事象を内包しているのではなく、事象にこそ真理は包まれている。それ即ち、全てを是とする根拠である。』この一文は虚偽魔法と真正魔法の境界を揺るがし、大きな議論を呼び起こしました。それと共に、虚偽魔法の効力も以前と同様か、もしくはそれ以上に倍増しました。使いようによっては、真正魔法よりも強大な力を出せる虚偽魔法は、数ある魔術のなかで重宝されています。

―ありがとうございます、座ってください。帰島さんの言うとおり、この信仰薬学ならびに虚偽魔法は棺ヶ淵という人物を抜きには語れません、ええ。この授業の終りには、棺ヶ淵理論をもとに信仰薬学の虚偽性についてのレポートを提出して貰いますので、授業をよく聞いておくこと。……………どうしました？ まだ授業中ですよ。

―あ、あの…。ちょっと体調が悪いので、医務室に…。レポートは今日中に出すんで、取りあえず早退さしてくれませんか…？

―その割に顔色は良いようですが？ 貴方、名前は。

―四万十 匪躬です。

―？ 出席名簿に貴方の名前はありません……四万十さん、別の教室から抜け出して来ましたね。

―ああ、いやその…。ちょ、ちょっとした出来心なんですって。ああでも！（九頭竜を振り返って）教会ちゃんへの気持ちは出来心なんかじゃないよ！

―九頭竜さん、これは貴女の手引きですか？ とにかく二人とも、

授業後教室に残るように！ 色々と校則についてお話する必要があります、ええ！

「最低…！！」

九頭竜はこめかみを押さえた。そこにノコノコ四万十が帰ってくる。

「いやーゴメン、バレちった」

「どうして私まで巻き込まれなきゃならないのよ、この馬鹿…！」

「ホントにごめん。今度飯奢るから許してくれ」

九頭竜は返答の代わりに、四万十の足を思いっきり踏みつけた。

逆崎 理由は傷つかない

四万十と九頭竜は交わす言葉も無く、互いに俯き加減で教室を後にした。四万十のせいで巻き添えをくった九頭竜は道に捨てられた子犬にでも怒鳴り付けそうな剣幕である。

「あゝ、終わった終わった。説教長過ぎて、すっかり腹減っちゃったよ」

四万十が呑気に腹をさすった。こういう男なのである、四万十匪躬は。

ただ、これで堪忍袋の緒が切れたというものだ。ついに九頭竜も八方美人ではいられなくなる時が来た。七方美人一方鬼人、ここに現る。

九頭竜は四万十に向き直ると、眉を吊り上げた。アーモンド型の大きな目も、それにつられて鋭利に尖る。そして何より、彼女の顔を一層恐ろしくしたのは笑ったように左右へ伸びた唇だった。

「アンタ大馬鹿やらかすのも大概になさいよ？ ぶち殺しますわよ」

「えっ」

「え、じゃないわよ。まず有り得ない、どこの世界に自分の本名を暴露する詐欺師がいるのよ。いくら信頼第一の嘘吐きでも本名は言わないでしょう？」

「教会ちゃん、す、すごい悪人顔だぜ…」

「黙りなさい。ねえ、アンタ四万十とか言ってたわね。私に醜態を晒

させたは罪は高く付くのよ？」

「出来る範囲で償いは――」

「出来る範囲？ それは無理ね。乙女のプライドは天より高く豆腐より柔らかいのよ。償い以前に、身体的にも社会的にも抹殺されたくないのなら、全てを捧げて私に協力することね。そうすればアンタの罪を軽くしてやってもいいわ」

「お、おう！ そりゃあ、教会ちゃんの為なら何だって協力を惜しまないさ」

「――なら話は早いわね。アンタはもう私の下僕」

四万十は躊躇も無く、二度うなずいて忠誠を誓った。逆らった殺されかねないと云う事を本能的に悟ったのである。それに、惚れた女に尽くす事も満更ではないようでもあった。

まあ何にせよ騎士道を重んじる四万十には、主人を持つことは願っても無い好機だった……。のだろうか。――言えることは善い悪いを別として、成るように成っていくのがこの男の人生であるらしいという事か。

逆崎 理由は困っていた。というのも、彼は今とてもまずい状況下にあるのだった。

四万十の代わりに出ることになった『自然魔法学』の授業で、逆崎は遺憾ない才能を見事に発揮していた。彼の實力から言えば当然のことである。もしこれが筆記などであれば問題はなかっただろう。

しかしこれが実習となれば話は変わる。

男というものは案外嫉妬深く、また見栄を気にするものだ。さらにこれらの性質は身分の高いものほど顕著になる。例えばこの蘆屋^{アシヤ}葦編^{イヘン}という男がそうであった。

「お前が他の教室から紛れこんだ生徒だと分かっていたのに、どうして教官へ告げなかったか分かるか？」

蘆屋は言いながらハープを奏でるかのように、後ろへ垂らした総髪を指で梳いた。色白の顔には細い唇が赤々しく伸びている。高い鼻梁にやや寄っている切れの長い目には意地悪そうな黒い光が宿っていた。

「ーいや、答える必要は無い。平民と口をきいてやる義務が貴族の俺に有れど、平民のお前が貴族に言葉を掛ける権利は無いからな。だがどうして俺がわざわざここへお前を呼びだしたか分かるか？」

「さあ、分からないよ」

「お前なんぞに同意するのも癪だが、確かにそりゃあそつだ。貴様なんぞに俺の気持ちが分かってたまるもんか。だがな、お前を呼びだした理由は俺の気持ちは無関係だ。何故か分かるか、平民？」

「分からないな。それは何故だい？」

「口に気をつけるよ平民。敬語は善良な平民の嗜みだろうが？ まあいい、俺は慈悲深いからな」

蘆屋は少し苛立ったような振る舞いで頭を横に振って、また話し始めた。

「―世を動かすのはシステムだ。神秘主義の馬鹿共はそれを魔法だなんて抜かしているが、真に学のある人間はそんなこと信じはしない。何故だか分かるか？」

「話がずれてるよ。本題は君の言う『システム』についてだろ。早く話してくれないかい？ 友人に昼を御馳走になる約束を反故にする訳にはいかないんだ」

「き、貴様！ 平民の分際で……！！」

蘆屋は机をドンと叩いて、逆崎を睨みつけた。

「いいか、平民！ 力を使えない人間が力をつけても意味が無いんだよ。意見を反映できない人間が思想を持つても意味が無いんだよ。お前みたいに平民がなまじ魔力を使えるなんてのは、もっての外だ。国のシステムにとっては害悪の種でしかない。クラスで誰も使いこなせなかった魔法を、たかが平民のお前一人がやってのけた。これは不味かったな。…俺はお前に同情できるさ。だがな、共感はいない。なぜなら――」

「済まない、もう約束の時間だから行くよ。話はまた今度聴くとするよ。肝心のシステムについても全く訊けなかったしね」

「き、き、貴様ッ！！ 決闘だッ、決闘だ！！ 分をわきまえて俺にひれ伏せば寛大な心で許そうかとも思っていたが、ここまで侮辱されれば黙っていられるものか！ たかが平民に手袋を投げるのも癪だが、仕方がないッ！！」

蘆屋は激昂して立ち上がった。木の椅子が後ろへ倒れて石の床に転

がる。何時の間にやら集まって来ていた見物人の生徒たちは、いよいよかと目を輝かせる。

「決闘なんてしても、何の解決にもならない。時間の無駄だ」

「澄ますなよ平民！ 怖いなら怖いと叫べ！」

「叫んだら決闘をやめてくれるのかい？」

「どうかな、貴様次第だ」

「コワイ、コワイ！」

野次馬達が笑った。どうやら彼らの目には蘆屋を逆崎がからかっているように映ったらしい。蘆屋の顔が一瞬で真っ赤に茹であがる。蘆屋は目を大きく見開いて、ベルトから引き抜いた杖を頭上から振った。杖の先に現れた炎の塊が、逆崎に襲いかかった。それを見て野次馬たちは驚きの声を上げた。蘆屋の放った魔法は、かすり傷程度で収まるものでは無かったからだ。

球状の炎の塊は人一人を丸々飲み込む程の大きさを維持したままで机や椅子をなぎ倒しながら教室の入り口付近に立つ逆崎にぶつかった。近くに居た生徒は悲鳴を上げて飛び逃げる。

「が、次の瞬間野次馬達は声を上げるのをやめた。やめたというよりは、出来なかったと言った方がよい。

「時間の無駄って、言っただろう？」

逆崎は無傷であった。蘆屋はそれを見て一気に蒼褪める。

「な、な、な…!？」

魚の様に口をパクパクさせる蘆屋を背に、逆崎は教室を後にした。すると野次馬の一人で、留学生らしい白人の男子生徒が少し興奮した口調で逆崎を呼びとめた。

「キミ、ドウシテ、無傷？」

片言の言葉で尋ねる。

「分からないよ。僕は生まれつき魔法の効かない体質なんだ」

「Oh , u n b e l i e v a b l e !」

するともう一人、この留学生の同国人らしい女生徒が逆崎にマントを渡した。逆崎は何だ、と云うように女生徒を見た。男子留学生は気を利かせて、逆崎に言っただけだ。

「体八、無傷デスガ、アナタ、服ガ燃エテ素ツ裸デスヨ」

逆崎は、ひどく赤面…はしない代わりに「嗚呼、これはいけない」と呟くのだった。

白銀亭と異国人

「逆崎イ、居るのか？」

四万十が寮の部屋に帰ってくるなりこう呼ぶと、寢室から「居るとも」と相変わらずに無愛想な逆崎の声が聴こえた。四万十は制服のネクタイを解き、そのままソファーまで行って倒れ込んだ。これは毎日繰り返される一連の行動と何ら変わりの無い、極めて日常的な光景である。

「四万十、今日は随分と遅い帰りだったね。何か遭ったのかい？」

逆崎が藍染の浴衣姿で居間に出て来た。彼の部屋着は何時もこれと同じ柄の浴衣である。どうやら逆崎は同じ着物を何着も持っているようで、かれこれ共同生活一か月と幾日、四万十は変化の乏しい同居人の様子を退屈そうに眺めてきたのだった。

「散々だったぜ。教官に俺のことがバレて、授業後もずっと説教だ」

四万十はズボンのベルトを器用に抜き去りあらぬ方へ放り投げた。毎日大なり小なり四万十の投げ出したモノは部屋の四隅に蓄積され、次第にその無法地帯は拡大を続けているのだった。部屋の管理者たる逆崎（四万十は一切清掃を行わない為、自然にそうなった）は床に落ちたベルトを拾い上げ、四万十へ投げ返す。

「で、目的の方はどうなったんだい？」

「それがよく、教官の説教が頭に来ちゃったせいでお姫様は御機嫌斜めさ」

それは厄介事を持ち込んだ四万十に対しての不満じゃ…と言いかけたのを、逆崎は口をつぐむ事にした。言った所で相手は四万十である。余計な知識を与えればさらなる厄介事を抱えてくるのがオチなのだ。

「…大変だったみたいだね」

「おうさ。でもよ、収穫はあつたぜ。なんと教会ちゃんが俺とタッグを組んでお前を―

「僕を？」

「い、いや違う。タッグを組んで色々面白い事を考えるんだ…。―とにかく九頭竜ちゃんとの繋がりは持てたぜ！ あとは距離をどう縮めるかだな。まあこれも逆崎の協力のお陰だぜ。ありがとよ」

「礼なんていいよ。それより今日は夕食を奢ってくれるんだったよね」

「くそ、覚えてやがったか」

「僕は一度覚えたことは忘れないよ。さあもうすぐ日も沈む。人が混む前に行こうか」

渋々、四万十も私服に着替えて部屋を出た。

新設された学生寮は見た目がさして周りの建物と違わないように、石材を組んだ堅牢な造りであった。その内部は貴族の子息を迎えられるに相応しく回廊からロビーに、果ては生徒の部屋に至るまで豪

華な装飾が散りばめられている。

学年ごとに分かれた4棟ある男子学生寮はそれぞれ5階建てで、屋上には多忙な学生のための食事処が設けられている。だがゆとりある学生たちは大抵の場合、旧高級市街を改築した商業地区のレストラン街まで繰り出して飢えた胃袋を満たすのである。その時ばかりは森閑とした遺跡群も若者たちの喧騒につつまれた。

これから逆崎と四万十の行く店はレストランとカフェを混ぜこぜにしたような所で、余り美味しくないハンバーグが有名であった。その名も『白銀亭』。石造りの建物が並ぶこの街では珍しく、異国情緒漂う木造建築の建物は西方の国から来た留学生にそこそこ人気があるようだった。

寮を出て歩くこと半刻、ようやく建物に着いた逆崎と四万十は服に付いた砂埃を払ってから木の回転扉を廻って中に入った。カウンター席は満員、十数台あるテーブル席は壁際の一つが空くのみだった。

「四万十の仕度が遅いからすっかり席が埋まっちゃってるよ」

「まったく、どいつもこいつも男ばかりで連れ立ちやがって。むさ苦しいったらありやしねえ」

四万十が周りを見回してぼやく。皿の底をフォークが叩く音や、硝子のコップをテーブルへ打ち下ろすリズムが騒がしかった。二人の前をコツテリした笑顔を浮かべた若い女性のウェイトレスが通り過ぎた。魔法によって動く、有名な舞台女優が描かれた『羊皮紙』のウェイトレスである。正面から見た分には良いのだが、横から見れば彼女は薄っぺらい。なにせほぼ2次元である、紙である。水に濡れると笑顔も萎む。美人薄命とか言われてよく揶揄されるのだが、経営者から言わせてもらえばいくら居てもかさばらず収納に困らな

いから評判は良いらしい。

「仕方ないさ、ここは街も男女で区別されてる。唯一共通に歩き回れるのは昼の商店街だけだよ」

逆崎は紙に描かれた手に盆を載せて歩くウェイトレスを見送りながら答えた。

「学術書だの薬草だのしか売ってない商店街でどうやって女の子とイチャイチャしろってんだ。学園は青春のはけ口を用意すべきだ！ッ！ 全ての男子生徒の煩惱を代表して、俺は断固闘争するぞ！」

店中に響くくらい声を張り上げた四万十を、迷惑そうに見やる生徒と拍手する生徒の割合は4：6くらいだった。どうやら6割の生徒は夜のレストランで女日照りを嘆き悶々としていたらしい。確かにそこに座っている生徒たちの話をよく聞けば雑談の多くは猥談の部類に入るものであるようだ。

そんな汚れた話題の遙か上を霞めるように、捕えどころのない放埒な呼び声がホールに響いた。

「逆崎サン、コツチ来ルトイイデス！」

「ーやあ、レイアティーズ。また会ったね」

声の先、ホールの中央近くのテーブルに、昼間逆崎を呼びとめた白人の留学生ともう一人黒人の留学生が何やら赤っぽい炒め物の乗った大皿を囲んでいた。

逆崎はホールの椅子やテーブルをかわしながらレイティアーズという白人の留学生の方へ歩いて行く。四万十もその後が続いた。

人込みをすり抜けて行くと、四万十は周りで猥談にふけっていた

生徒達の様子が少し変わったことに気付いた。しきりにこちらへ目をやってヒソヒソと声を潜めて話すのである。何かと思い耳を澄ましてみれば、彼らの口々から断片的に逆崎の名が聴こえてくるのである。

「逆崎。お前、何かあったのか？」

逆崎は後ろから肩を掴まれ、四万十へ向き直った。

四万十が眉間に皺を寄せて、見透かすような目で逆崎に聞いた。す。厳しささえ感じられる強い口調に、逆崎は困惑したような顔をした。

「どうかしたのかい？」と逆崎はどこ吹く風で答える。

その硬直した所をレイティアーズが二人を仲介した。

「四万十サン、デスネ。ココ座ツテ下サイ。昼二色々アツタンデス。デモ詳シク説明スル前ニ、何力食事、注文デス」

レイティアーズは西欧人としては気弱そうな顔つきで、俯くとすぐに眼元へ影がかかった。柔らかそうな金髪を額に垂らし、凜々しい眉に幾らか前髪が到達している。蒼い瞳の両眼の間、筋の通った驚鼻のてっぺんにニキビが小さく赤を帯びていた。

彼に促されるまま逆崎と四万十はテーブルについた。四万十は何故この外国人が逆崎のことを知っているのか訝しげに思ったが、取りあえずチーズリゾットを注文することにさっさと決めていた。

「四万十サン、初メマシテ。ダンデリオン連邦カラ来タ。私レイティアーズ・D・グティレス。ヨロシク」

「カタカナだらけで訳分からねえ…。どっから国名でどっから名前だ？」

「幾ら馬鹿な君だつて国の名前くらいは識別できるだろう。ダンデリオン連邦国だよ」

逆崎が耳打ちする。四万十は「ジョークだつて」と言いつつも得心のいかぬような顔である。

「彼八、私ノ友達。名前八、オセロ・ディアラ。彼八完璧主義デスカラ、言葉ヲ完璧ニ、習得スルマデ、口ヲ開カナイト思イマス」

レイティアーズは店に居る人波の中でも頭一つ飛びぬけた、筋骨隆々たる黒人の留学生に目をやった。オセロは黒と言うよりはやや焦げ茶っぽい色の肌で、どうやら多様な人種の血が混じった移民の生まれらしかった。精悍な顔つきで、パーツの大きい目鼻の配置は肉食動物的である。しかし、その野生的な顔の上には印象と全く異なるインテリな丸眼鏡が鼻に乗っていた。こうしてみると、方々へ曲がりくねった短髪と相まって、若き科学者の様な雰囲気も強まる。ただしオセロは自分が紹介されている時にもまったく口を開こうとしないので、いずれの印象を取っても近づきがたい人物であるのは変わりなかった。

「オセロ君モ、私ト同ジ学校ノ出身デス」

レイティアーズはテーブルに身を乗り出して、雄弁に故郷の思い出を語り始めそうだったので差しこむように四万十が口を挟んだ。

「ところで、昼間何があつたのか聞かせろよ。無理言つて授業を交代させたのは俺だ。そのことで逆崎が誰かから悪く言われるなら俺はその分の罰を受けなきゃなんねえ。そのことで逆崎を脅かす奴がいるなら俺は逆崎の立ち位置に甘んじて立たなきゃなんねえ。俺はこれでも軍人の息子だ、己のしたことに背は向けられねえんだ」

四万十がここまで言うと、これまで何のリアクションも無かったオセロがニヤリと真意の分からぬ笑みを浮かべた。

「きもちわりいな」

四万十が率直に言う。

「オセロハ、貴方と同じく、父上が軍人デス。何力通ズル所口ガ、アルンデシヨウ」

レイティアーズは胃の弱そうな顔に笑窪をつくって笑った。逆崎もほんの少し口角を上げて四万十を見ている。四万十は本当に吐きそうな顔で、不貞腐れた。

「男と通じたって嬉しくも何ともねえやい」

白銀亭騒乱・上

「蘆屋だつて！ あの腰ぬけの没落貴族風情がか！？」

四万十は昼に起こった逆崎と蘆屋の決闘の話を聞いて素つ頓狂な声を上げた。レイティアーズが昼の決闘と、そこで親しくなった逆崎とのくだりを片言でやっと説明し終えたときだった。どうやらそこで、レイティアーズは逆崎と話して四万十を知ったらしい。

「デモ彼ハ、他ノ貴族ノ子供ト集団ヲ、ツクッテイマス。アンマリ、喧嘩シナイ方ガイイデスヨ」

レイティアーズは苦笑ともつかない顔で、四万十に忠告する。

「それぐらい分かつてる。馬鹿に構ってたら俺まで馬鹿みたいだ」

「どの口が…」

「なんだ逆崎？」

「いや別に」

四万十は背もたれに寄り掛かって、大きなげっぷをした。すでに空になった皿を取りに来た、例の紙ウェイトレスが嫌な顔して手で仰ぐ。

「ーで、お前は どうして魔法が効かないんだ？」

「分からない。気付いた時からこうだったんだ」

「失礼デスガ、両親八貴方ニツイテ、何カ言ッテイタンデスカ」

「何も」

「何もって…。そういや、逆崎の身近な話は聞いたことねエけど一体どうなってんだ？」

「そう言えばそうだね。別に隠しだてする所も無いし、今更言つのもなんだけど、僕の出身は北端にあるカレハという小さな町らしい。父の名前は逆崎 臥竜。母は逆崎 美樹。父の仕事は漁師で、稼ぎは多くない。だから僕は学校へは行かずに独学で勉強した…。らしい」

「？ なんだ、まるで他人事だな」

「h a h a h a 逆崎サン、マルデ外国人ミタイナ喋リ方デスネー」
からかう四万十とレイティアーズを余所に、逆崎はこめかみを押さえる。

「…他人行儀。僕にも分からないけど、どうしてかそう思えてならないんだ。ごめん、この話はまた今度にしてくれないかい…？ 少し気分が悪いんだ」

「大丈夫デスカ？ スイマセン、お冷ください」

「なんでお冷だけ流暢なんだ…？」

すぐに紙ウェイトレスが水の入ったグラスを持って、テーブルに

走り寄ってきた。レイティアーズがそれを受け取ろうと手の伸ばす。

―が、寸前で乱入者の細い手がグラスを横から掠め取った。そして、そのままグラスの水をレイティアーズに引っ掛けたのである。

すでに店内は静まり返っていた。白銀亭に突如として現れた学生たちの集団が、蘆屋率いる貴族連中であるとすぐに知れたからである。店に居た誰かが、蘆屋へ逆崎の来たのを知らせたのかもしれない。今やもう学園中に、『不死身の逆崎と憤怒の蘆屋の決闘』の噂は広まっている。白銀亭で学生たちが逆崎の名前を囁いていたのは、このためだった。

レイティアーズの金髪に水が滴っている。口は固く閉ざしたままであるが堀の深い彼の瞳孔には炎が宿ったようだった。そしてそれは四万十も同じであった。

「やあ、四万十匪躬。君が逆崎と授業を変わったんだってな。ルールを守れない兵隊はならず者とどんな違いがあるのか教えてくれよ」

蘆屋がそう言って笑うと、彼の後ろに連れ立った貴族学生達も下品な笑い声をあげた。もともと店に居た学生客たちは不穏な空気を察知して、ソロソロと立ち上がっていた。だが一方、見世物を楽しむように、ゆったりと席に構えて展開を待っている生徒もいる。

「逆崎イ、昼間はスツカリ騙されたぜ。だがなんだ、単なるペテンか。そこにいる留学生と組んで、俺の魔法を無力化したんだろ？」

つたく、どこの田舎もんだか知らないがやはり愚民といえど小手先だけの知恵も付けさせてはいけならしいな。すっかりのぼせ上って、やれ無敵、それ不死身ときたものだ。悪役に引っ張られる我々の身にもなって欲しいものだ。貧すれば鈍すというが、不満を喚き散らすしかできないお前らにこの学園にいられる価値があるのか

？ 愚民は愚民らしく土と戯れてるよ！」

― 蘆屋のこの言葉を皮切りに、大乱闘が起こった。

誰が始めに魔法を放ったのかは分らないが、後にレイティアーズは蘆屋が始めに杖を振ったと証言している。と言っても、それはほとんどレイティアーズがけし掛けたと言ってもいいようなものだったのだようだ。先に手を出させる…その点で西欧人のレイティアーズはしたたかだった。しかしもしレイティアーズが仕掛けさせなかったのなら、その代役は必ず四万十が務めていただろう。もっとも、四万十の場合はもつと強引な手を使っただろうが。

蘆屋は最初に魔法を行使したが、それが最後でもあった。事態を他人行儀に傍観するかと思われたオセロはそれまでの沈黙を破り、迅雷の勢いで蘆屋へ『呪詛返し』を行った。蘆屋は自らの放った空気を圧縮した、見えない爆弾のようなものを腹に喰らって天井まで吹き飛んだ。蘆屋と天井に下がっていたランタンが床に落ちると、一気に乱闘が始まるのだった。

これが、レジナルド魔法学園の歴史における三大乱闘の一つとして長く語り継がれる『白銀亭騒乱』である。

白銀亭騒乱・中

四万十はテーブルの上に乗って、巨体の学生の横面を拳で強か殴りつけた。殴られた所から厚く盛った頬肉に「ぶるん」と波が立ち、半開きの口から唾液の飛沫が飛散する。そのまま貴族学生は膝から崩れ落ち、ドウと倒れて気絶してしまった。

勝利の咆哮を上げるように四万十は叫ぶ。

「つらア！！ 貴族の坊っちゃん共、殴り方を教えてやろうかつ？」

「—こ、この！ ポーン風情が、いきがるな！」

四万十へそう応酬した貴族側の学生が杖を横に振って、テーブルの足を断絶させた。傾いた四万十がバランスを崩して、「わっ」と声を上げながら床に転がる。

その脇をレイティアーズが走り抜けて、勇猛果敢に敵の懷へ単身乗り込んだ。彼の猪突猛進に驚いた学生たちが息を飲むか飲まないかという所で、レイティアーズが上に掲げた杖の先から縦横無尽に紫電が走った。

「あぎぎぎぎ！！」

不幸にもレイティアーズの近くにいた2人の生徒が電流を浴び、痙攣しながら床へ倒れ伏しピクピク手足を震わしている。その様子は死にかけの蝉に似ている。

残る4人の貴族生徒は始めから引く気はなかったらしく、目をギラギラさせて杖を構えていた。

「このッ」

坊主頭の貴族学生が衝撃波を放って、こんどは標的となったレイティアーズがテーブルや椅子を巻き込みながらホールの壁まで吹き飛んだ。

オセロと逆崎と四万十も次々と魔法を繰り出して、貴族学生に応戦している。見物人の生徒達も何人かが飛び交う魔法に巻き込まれ、悲鳴を上げながら壁へ天井へ吹き飛ばされていた。また、自ら嬉々として乱闘に参加する生徒も大勢いた。馬鹿らしいと仰るかもしれないが、猥談と喧嘩は男の動力原である。男の原動力は歴史のターニングポイントである。であるならば、これはこれで最低限度文化的な行動と言えるのではないだろうか。…極論ではあるが。

いつの間にか白銀亭のホールは戦場と化していた。そこから爆発が起こり、青い炎があがり、人が勢いよく吹っ飛んでいった。頭に火の着いた紙ウェイトレスが被りを振りながらホールを走り回っている。

白銀亭の店主が騒ぎを聞きつけて経営室からノソノソ出て来たが、その時にはもう手のつけようの無い有様で、哀れな小太りの中年店主は額に青筋を立てて誰かれ構わずに怒鳴るしかなかった。

また、入り口ではあの人物が声を上げていた。背の高い、眼鏡をかけた生徒である。彼はそう、百笑と共にこの学園に潜入している王国軍特務探査部の『馘先輩』もとい馘クビキナンシ南枝であった。偶然この傍を通りがかったとき、乱闘騒ぎが起こったのである。馘の学生としての顔は学園自治委員会という学生組織の一端である学園法審理部、通称『法審』の副部長である。法審は学園内の秩序を守る風紀委員のような部署であり、質の悪い不良生徒には魔法で制圧する権限も持っていた。ゆえに馘はこの騒ぎを見過ごすわけにもいかなかったのだ。

「学園自治委員会学園法審理部だ！騒ぎをやめろ、ここにいる全員、杖をしまえ！懲罰房へ行きたいのか！」

「― 馘先輩、誰も言っても聞いてませんって。もう武装弾圧しかないんじゃないですか」

今日、馘と見回りを行っていた法審に所属する後輩の男子生徒が馘に物騒なことを提案する。どうやらこの猫背の男子生徒はやく乱闘に参加したいらしい。

「お前は黙っている！！むしろ弾圧される！法審に入れば合法に魔法で暴れられると思ったら大間違いだぞ、我々は学園の秩序と品位を―

説教を始めた馘の顔に、放物線を描いて飛んできた誕生日祝いか何かのケーキがぶち当たった。生クリームが顔からずるずる滑り落ちて、馘の顔が現れる。

「な、なんてことを！。ボクの敬愛してやまない神聖絶対不可侵たる馘さんに物をぶつけるとは！。これはボクの理性を吹き飛ばし、暴徒たちを冷酷無比な魔法によって成敗するに十分な言い訳…いや間違った。ボクの行動を正当づける『やむにやまれぬ』不幸な出来事だ―」

言い終わるが早いか、その後輩の法審部員は戦場に飛び込んでいった。敬愛してやまない神聖絶対不可侵の馘先輩に脇目も振らずに、である。

「誰か代わってくれ…」

鹹はこの任務が終わるころまでに全ての髪が抜け落ちている予感がした。

「四万十、四万十!!」

逆崎が倒れたテーブルの影から四万十を呼んだ。四万十は「潰れる!!」と叫んで杖を振っている。『+0』の魔法を放ったらしいが、うまく決まらなかったらしく相手へ罵声を浴びせながら逆崎の隣に滑り込んできた。次の瞬間、それまで四万十の立っていた場所の床が盛り上がってから弾けるように爆散した。もはや敵が誰であつたのか分からなくなっている。皆が皆をとにかく倒そうとしていた。

「怪我無いか逆崎!？」

「ある訳ないだろう、さっき話したじゃないか」

「ああ、忘れてたぜ。魔法効かないんだっけ」

四万十が言いながら頭を掻いた。

「レイティアーズは大丈夫だろうか」

「あいつならさっき、オセロに担がれて店を出てったぜ」

「そう、良かった。そろそろ僕らもこの場を去った方が良いんじゃない

ないかな？ 君はまだ大丈夫だろうけど、僕は親が平民だから間違えなく退学処分だよ。早いとこ逃げ出したいんだけど、四万十はどうするんだい」

「たしかに退学処分は俺には無いだろうが、バレたらきつい説教は確実だな。説教は嫌いだから、俺もずらかるとするか」

四万十がそう言い終えぬ内に、二人の隠れていたテーブルが砕け飛んだ。驚いて、逆崎と四万十が同時に振り向く。人込みの向こうに魔法を放ったらしい坊主頭の貴族学生が目を怒らせて仁王立ちしていた。

「もう尻尾を巻いて逃げようってか！？ 意地も誇りも無いくせに、俺たちを敬おうともしない。貴様らが態度を改めれば、それなりの幸せを提供してやろうとこっちだって気にかけてやるのに……。――仕方ないよな、言う事をきけない犬には鞭を打つしかないだろう？ だからほら、きゃんきゃん泣き喚けよッ！」

貴族学生は大声で言いながら魔法を乱打してくる。だが昂奮している為なのかその標的は散々である。逆崎と四万十は咄嗟に左右へ転がって、唯一これだけ二人の方へ来た魔法の弾丸を避けた。

「逆崎、先行っててくれ。こいつを2回くらい半殺しにしたらすぐ行く」

「∴ 50 + 50は何になるか分かるかい？」

「？ …………… 100だろ」

「それを心にしまつて置いてくれ。とても大切なことだよ」

「訳分からんが、逆崎がそう言うなら」

そう言つて四万十は立った。隙を見て、逆崎は裏口に走っていく。途中唸りを上げて飛んできた魔法が逆崎の体に当たったものの、当人は何事も無かったかのようにそのまま行つてしまった。

「あいつの体どうなつてんだ…？」

四万十は言いながらも迫り来る敵へ杖を向けていた。貴族学生は四万十から5歩ほど離れた所で立ち止り、不敵な笑みを浮かべている。腕には覚えがあるのだろっ、お山の大將とは彼をいい得て妙であつた。

「二人がかりじゃなくて良いのかな？ 無理しなくてもいいんだぞ
兵隊蟻」

「あんまり舐めてくれるなよ貴族の坊っちゃん。俺は強いぞ」

そうである。もう一人、ここにお山の大將がいることを忘れてはならない。天上天下唯我独尊、四万十匪躬は馬鹿である。四万十匪躬は馬鹿であるからこそ、実質的にお山の天辺に腰を据えて生きてきたのである。お山の上に産み落とされた、貴族の学生との根本的な違いはそこにある。

四万十の放つた言葉の語尾が硝子のコップの割れる音に消えた時、対面した二人は同時に杖を振つた。鋭い擦過音に続いてホールに――際大きな爆裂音が空気を揺るがし、天井に積もり積もっていた大量の埃が宙を舞う。

――誇りだか埃だか、とにかく決闘の夜は長い

白銀亭騒乱・下

鹹 南枝は生クリームまみれの顔を怒りに歪めて、白銀亭の乱闘騒ぎを前に立ちつくしていた。足元には紙ウエイトレスの残骸や先ほど飛んできたケーキの皿が上に背を向けて転がっている。床から天井まですべてが滅茶苦茶であった。如何に治安を守る法審の副部長と言えど、これは手の着けようがないほどの騒ぎである。確かに王国軍特務探査部大尉の鹹であれば何とかしてこの場に居る全員を制圧するのは不可能ではないのだが、それでは能書き『ただの学生』としての領分を大きく超えてしまう。

生真面目で堅物の鹹はストレス性の顔面痙攣を起こしながらも、混沌の激流に流さるるを良しとせず、せめてもの反抗と言わんばかりに声高に学園規則第3章『高潔な学生生活を送るべし』を暗誦して暴徒へ説教を垂れようと無駄な努力をしていた。

もともと、鹹を苛立たせた極め付けは、同部の後輩の暮田 クレタ キョウ 虚嘘の享楽主義である。治安を収めるどころか彼のすることなすこと、何処へ行っても禍根を残す。この数日前にも、3年生の女子生徒と男子生徒のいじらしい痴話喧嘩を宗教戦争まがいの殺し合いにまで発展させた。鹹の捨て身の介入でなんとか事なきを得たが、危うく『文字通り』鹹に対して白羽の矢が立つ所であった。恋のキューピットは小さな弓でハートを射抜くというが、暮田の場合は男女へボウガンを渡して心臓を射抜き合わせるのだ。自らの手を汚さないのも、質の悪い。

「暮田、どこへ行った貴様！ 出てこないなら探し出してやろう。だが『乱闘のせい』で』もしかしたら貴様のド頭ぶち抜くかも知れないから気をつける……！」

鹹がホールの真ん中で暮田を叫ぶのだが、この喧騒の中で鹹の声だ

けを聞き分けるのは難しい。もとより暮田がこの声を聞いたとしても「何ですって！？ 不肖、この暮田 虚嘘、一生の不覚であります……！ いくらこの騒ぎの中と言えども先輩の言葉を聞き洩らすとはッ！」などと、いけしゃあしゃあ知らばくれるだろう。

「鹹先へ輩っ。どうしたのそんなに怒っちゃって。顔にクリーム付いてるよっ？」

突飛というには余りに間延びした、聞き覚えのあり過ぎる、お転婆少女じみた声に振り返った時にはもう遅かった。長い舌が鹹の頬に付いた生クリームを絡め取って、ちゅぱちゅぱと口内で甘味を堪能していた。

「ど、百笑ッ！？ なぜここに居る、女生徒禁制だぞ！」

「シゝ。わざわざ男子の制服着て来たんだよう。んで、鹹さえ黙っててくれれば気付かれないってゝ」

「くっ。こっちに来るんだ」

「やゝん、意外と積極的っ」

「黙れこの」

鹹は裏口の方へ百笑を引っ張って行き、人混みが途切れた所で押し殺した声で説教を始めた。

「何故ここに来た。Dr・眼鏡橋の消息を追うんじゃないのか……！？」

「探してたわ、ちゃんと。でも痕跡を消してるのか、五感じゃ探知出来ないの。んで、ずっと探してたんだけど見つからないから、そろそろ飽きて来たな〜って思ってたら、何だか男子の方が面白そうなことになってるじゃないか！でも任務をほっぽり出したらきつと誠に怒られるなあ〜。ま、いつか。てな具合で…来ちゃった！」

「来ちゃった！ペロツ——じゃあ無いんだよ！！」

「まあまあ怒らないでよ鹹先輩」。それに悶々と部屋に籠っているより、取りあえず外へ出てみれば案外すぐに解決するってこともあるかもよ？そうアレだよ。案ずるより産むがヒロシ…、キヨシだっけ」

「帰れ。俺はもう頭が痛い」

「あーっ！！見て見て、アレって逆崎理由じゃない！？不死身なんだって！」

鹹の言葉が全く耳に入らないかのように会話を中断させると、百笑がこちらに走ってくる男子学生を指差して興奮したように叫んだ。鹹は迷惑そうな顔を隠そうともせず、逆崎の姿を横目で捕える。

「下らない。そんなデマに左右される諜報員は前代未聞だぞ。どうせただの…」

「——きゃっ！！すっごーい！！」

鹹が思わず言葉を失い、百笑が目を丸くして歓声を上げた。彼らの目の前で、魔法の直撃を受けた逆崎がそれに対して何の反応

も示せずに「ちょっと失礼」と鹹の脇を通り抜け、裏口から悠々と出て行ったのである。

「なんだありゃあ…」

これまでの激昂も尽き果てた様子で鹹は、次々に襲い来る現実で途方に暮れてしまったようだった。逆に百笑は興奮に頬を紅潮させ、目をキラキラさせていた。

「鹹、私は別に興味ないけどね、逆崎 理由を要観察対象にすべきだと思っの。ほら、昔この学園の地下施設で人体実験が行われていてるって情報があったじゃない。もしかしたら…!」

「ま、まさか。そんな何十年も昔の噂を引っ張り出すものではない。お前は今やらなければ…っておい!」

百笑が逆崎の後を追って走り出した。鹹も追いつがる。白銀亭の裏口から狭い街路に出た時、店から大きな爆発音が轟いた。

「ええい、ままよッ!」

鹹は白銀亭を悔しそうに一瞥して、百笑と逆崎の後を追った。

後日談的に言ってしまうえば、白銀亭の乱闘騒ぎはこの大爆発で鎮静化した、と言えば結果論ではあるが乱闘していた生徒達のほとんどが爆発に巻き込まれて行動不能になったのであった。その直後、法審の部員達が鬼の様な剣幕で現れホールで力尽きていた全生徒24人を問答無用で懲罰部屋へ連行した。四万十も連行された中の一人で、そこでコッテリ絞られたのか流石の彼も1週間はシユンと萎んで大人しかった。が、その一週間後には先週のテンションを挽回す

るようにより一層遊びに全力を尽くした。

白銀亭騒乱が終息し舞台が次に移るかと思われるかもしれないが、そうはいかない。あの夜、本当の事件はこの後に起こるのである。

………

………

…

「逆崎……！！ な、何故Dr.眼鏡橋を殺した！？」

鹹は、闇の中へ叫ぶ。逆崎の体らしきシルエットがぼんやりと浮かんではいるものの、彼がこちらを向いているのか、それともすでに闇のもっと深くへ目を向けているのか判別できずに、ただただ焦燥に似た恐怖があるだけであつた。

「邪魔だつたから……じゃあ理由不足かね？ まあなんにせよ、これを見られたからには君も邪魔なんだ。逆に言えば見さえしななければこうなることも無かつたんだが……。私を悪く思ってくれていいだから、出来れば抵抗せずに死んでくれ……と言っても、都合が良すぎるか」

歯切れの悪い喋り方だつた。言うなればそれは幼児語に近い。それらが相まると人間離れしたおどろおどろしさが声に生じて甚だ不気味であつた。

鹹は脇から冷たい汗がツツと滑るのを感じながら、杖を握り締めた。軍隊の訓練では何度か死にかけたこともあった。だがそのどんな時よりも今ほど、『死』を感じたことは無かった。

「百笑……あとは任せたぞ」

鹹は気を失って倒れている百笑に、言葉尻の震えた言葉を残した。幸い、百笑はこの言葉を聞くこともなかった。そうであったからこそ、彼女は鹹と同じ運命を辿らずに済んだのだ。

白銀亭騒乱・裏

逆崎は自分の後を追う者がいることにいち早く気付いて、暗い路地裏へ身を翻した。ガラクタに隠れていたネズミが迷惑そうに這い出してきて、せかせかと闇に消えていった。

しかし一学生に過ぎない逆崎が何故、極めて優秀な追手である百笑と馘の存在を早急に確認することが出来たのか。その訳は単純であるが、非凡の者にしか成せぬものであった。逆崎は白銀亭の乱闘から逃げ出して来たものの、貴族学生がしつこく尾行してくる可能性を踏まえて予め魔法で自身の『影』を作っておいていた。自身の虚像を作ること事体は難しいものではないのだが、これを動かすとなるとこの学園の教官クラスの人間でも神経を使う。ましてや今の様に長い距離を影に走らせるとなると、いくら優秀な魔導師でもどこかでボロを出してしまうだろう。だが逆崎はそれを完璧にこなしてしまった。

逆崎は自分の影を追う二つの人影を見つけて、ルートを変えた。影はそのまま直進させ、追手を巻く為の罠にすることにした。

「百笑、待て！ 何か妙だぞ」

初めに異変に気付いたのは馘である。百笑は追跡に夢中なのか彼の言葉を歯牙にもかけない。

——が、それも素振りだけで実はよく馘の言葉を聞いていたらしく、百笑も走りながら「んん??」と言った。

「ありゃー、やられちゃった。逆崎くんやつぱり凄いよ」

百笑がそう言つて、これまで追つていたものにプイと背を向けた時に丁度、逆崎の影が薄れて消えた。役割を果たし、影は影に還つたのだ。

「錯覚投影か。それをここまでとは……」

誠も流石に言葉に詰まるようである。

「こうなつたら意地でも見つけてやるう」

悔しそうな顔を一瞬だけ覗かせて、百笑は周囲にそろそろと感覚神経を伸ばし始めた。

——と、百笑はハツとして頭をあげた。

「どうした？」

「眼鏡橋がある！」

「何ッ！？ 彼はどこにいるんだ」

「ううん、追う必要は無いみたい。向こうからこっち来てるんだもの……」

百笑は杖を取り出し、狭い路地の一角へ体を向けた。それとほぼ同時に、路地から一人の男が飛び出して来た。

細長い手足を大仰に振り回して、眼鏡橋 日紫喜は飛び出して来た。保健医であつた故にいつも着ていた清潔な白衣はもはや見る影もない。「白衣」だったものは不規則に刻まれた皺でヨレヨレになり、背中から胸辺りまでは砂埃で黄ばんでいる。平生、オールバックでしつかりと固められた黒髪も、今はあらぬ方へと散つて散つて、数日間にわたる彼の取り留めない逃散を物語っているようであつた。酷いのは身なりだけではなく、その顔にも表れていた。土気色にやつれきつた顔。頬はこけ、唇はカラカラに乾いてひび割れている。ただ目ばかりが炯々としていて不気味である。

「き、君達を知っている。軍の人間だろう…？ 僕は、軍の庇護を受ける為にこんな危険を冒してまで君らの前に姿を現したんだよッ。はやく將軍を出せ、出せ、出せ！」

鹹と百笑は、突然姿を現した眼鏡橋の言つた言葉に内心動揺した。彼らの潜入任務を知っている人間はごく限られている筈なのだ。そしてまた、眼鏡橋の異様な怯えようも気にかかる。

「落ち着いて下さい眼鏡橋教官」

鹹がしずしずと言葉を紡ごうと試みるが、眼鏡橋は早口でそれを遮つた。

「將軍に伝える。この学校は大災厄の発端にある…、もう僕じゃあどうにも出来ない。嗚呼、傘路教官を殺すべきじゃなかったのだ。遅かった、全く。何もかも根雨原、根雨原から…。あの人は分かっていたんだ！——いいや！ だが、僕はまだ諦める積りは無いぞ…。僕を保護してくれ。四万十將軍はあのプロジェクトを知ってる筈だ…！ 研究の意義を理解すれば、きつと援助が得られる。下らんプライド？ いや、僕の成果を、歴史は、称賛する」

血走った目で、頭を掻き毟る眼鏡橋は途切れることなくまだ何かを喋り続けているが、もう言葉は意味を成していなかった。

「どうするの、この人？」

百笑が本当に困ったと言う様な風に顔を見やった。顔は「俺に聞か、それを」と言ったが、「が、やむなしか」と不承不承に頭を抱えて考え纏めようと努め始めた。

「どこかに匿うより他に無いだろうな。今回の事件に彼は深い関わりがあるようだ。保護しないのも色んな問題がありそうだしな……」。將軍に報告して、増援も送ってもらおう」

「どこに匿うの？ こっちは砂漠の迷子ちゃんで一杯いっぱいなのにい」

「そうだ、その少女は一体何者だったんだ？ 学園の生徒か？」

「んー、分かんないや。あの子、ちょっと普通の子と違うみたいだから。ま、こんなことは後で良いから早くこの人を連れてこようよ。何か嫌な予感がするもん」

百笑は珍しく眉をしかめて、険しい顔をしている。その時、眼鏡橋が焦点の合っていなかった目を百笑に向けた。そして、ぼつりぼつりと、またうわ言のように言うのだった。

「ははあ、彼女は無事か。あれは、傘路先生と僕の傑作だよ。その性質故に精神の均整を失ったが、根雨原は一つの真理に限りなく近い。ふふ、皮肉なものだ。彼女がいなければ僕はとくに死んでい

ただろうね。まさか彼女が計画を外に洩らすとは、奴も意外だったに違いない。くく、ざまあみろだ。ああ……。彼女は優しい子だったよ、昔からね。根雨原^{ネウバラ フクネ} 福音はね、僕の初恋さ。それをね、僕はくひひっ」

喉を引き攣らせたような、卑俗な笑い声をあげて眼鏡橋は天を仰いだ。その瞳は、月に照らされ弱々しく光っていた。

「Dr・眼鏡橋、詳しい話は後でお聞きましょう。とにかくここを離れて、別の場所へ」

「何故？ 場所を変えても奴らは見つけ出すさ。だから君らのどっちかに僕の身代わりになってもらって、残った一人には僕を將軍へ取り次いで貰う。とても合理的選択だと思わないか」

「身代わり？」

百笑がサツと身構える前に、眼鏡橋は杖を振って彼女の華奢な体を吹き飛ばした。百笑は遺跡の壁にぶつかってずるずると倒れ伏した。

「クッ！」

鹹が炎の玉を放って眼鏡橋の杖を折ろうとするが、眼鏡橋が杖で小さな円を描くと、その炎の玉は眼鏡橋の杖の為すがままになつて、逆に鹹の杖を折ってしまった。

「ドクター、どういふ見ですかッ！？ 我々に手向かうなど——
！」

「動くなよ、鹹くん。君には別の役割がある。百笑くんには悪いが、

彼女は私の身代わりとして時間を稼いでもらう。僕はね、まだ死にたくないんだ。くひひ、ひ」

「ドクター……！！」

——その時。

『こんばんは』と、嫌に丁寧な口調が馘の気を削いだ。

『……こんばんは、Dr. 眼鏡橋。良い月夜なのに物騒ですねエ。それはそうと、貴方。あまり過去のこと深く悔恨されなさるな。貴方は少しも間違っていないんだ。現に今だって、貴方は生において純粹だ。実に美しい。道徳心がどうのルールがこうのなんて云う偽善者こそ、不安定で不完全で不人情な人間でしょうよ。——ああでも、貴方が生存するのを見逃してあげることは出来ません。だからせめて、善い人間のままに死んでくださいよ』

天蓋を覆うような声が虚ろに遺跡の街を木霊した。掴みどころの無い、また底の知れない不思議な声である。その声を聞いて眼鏡橋は「ひいひい！ わ、病葉^{ワクラバ}あッ！！」と狂気の悲鳴を上げた。

「誰だ？ 何処に居る！？」

馘が周囲を見回した。辺りに人影は無い。ただならぬ気配のみが、殷々と迫って来ている。

眼鏡橋が逃げ出した。情けない悲鳴をあげながら、あらん限り手足を動かし走って行く。恐怖のためか何歩も行かぬうちに足がもつれて前につんのめるが、次の瞬間何故か後方ヘドウと勢いよく倒れてきた。

見ると、眼鏡橋の腹にはポツカリと大きな穴が空いている。砂の上

を黒い血が這って広がってくる。眼鏡橋は手足を痙攣させながら、ヒステリックに浮き出た目玉をギョロギョロ動かし、「うああ」だとか「ぶふう、ひひい」と呻いていたが、不意にゴボリと大量の血が口から漏れ出すと遂にピクリとも動かなくなった。アツと言う間の出来ごとに、呆然としているしかなかった骸は、眼鏡橋の逃げようとした先に居た人影を見、今度は愕然とした。

黒いローブに身を包み、物憂げな表情をした青年がそこに立ってる。どこかで見たことがある。それも最近だ。そう、記憶を手繰る必要もない、彼は――

「逆崎 理由か？」

骸の問いには答えず、青年は闇の中に佇んでいた。

「病葉」

青年が、くぐもった声で誰かの名を呼んだ。すると、先ほどの声がどこからともなく響いてきた。

『ま、仕方がない。彼らは運が悪かったのだよ』

声の主は半ば同情的に、溜息交じりのように言った。

『神は犠牲を求めておられるのさ』

「……！！」

了解した、と目で頷いた青年が骸の方へ歩み寄ってくる。死の足音はやけに大きく聴こえた。

.....
.....
.....

ここレジナルド魔法学園では噂話の情報量はある一種のステータスとなっている。誰も知らない情報を仕入れようと、通ぶったり、その筋で自身の地位を高めようとする生徒は東奔西走してまでも噂を集めようと必死になっている。中でも最近でもっとも注目を集める噂は、「Dr.眼鏡橋、自殺」「逆崎と白銀亭騒乱」「法審部副長の失踪」そして「北条窓霞ついに復活」である。

白銀亭騒乱・裏（後書き）

取りあえず一章完結であります。

自己満足作品故に、読者無視の不定期連載と相成っております。
ほとほと愛想の尽きた方、その気持ちは分かります。

——しかし懲りない改めない。気の向くままに書いていく積りです。

焦燥と暗雲

雲海の月が、この学園都市にもやってきた。

太陽はいつ果てるとも知れない灰色の雲に覆われて、湿気を含んだ南風は生温かい。ジットリと肌に張り付く制服をバタバタ煽ぎながら、四万十と逆崎が教室を後にした。

「四万十はこれから懲罰房かい？」

「ああ」

四万十にしては幾分そっけない返事が返ってくる。先の事件のことでコツテリ油を絞られたのだろう。今のところは反抗する元気どころか、軽口を叩く気力も無いようだった。

「そう。じゃあ、僕は先に帰ってるよ」

「ああ」

逆崎は、あの四万十をここまでやつれさせる懲罰房の支配者、法審部部長とはいかなる人物であるのか想像を掻き立てられた。だがその人物像が形作られる前に、逆崎の思案は横槍に貫かれた。

「逆崎くん、ちょっと良い？ 別に良くななくても連れていくんだけどね」

逆崎の腕を掴んで、小柄な女生徒がつっけどんに言った。

「唐突ですね」

「唐突ね。私は法審の百笑 迦日。よろしくとは言わないわ」

悪びれずに百笑が言つてのける。その後ろから、登場の頃合いを見計らつて来たのを誤魔化すかのように欠伸をしながら、男子生徒が現れた。彼のひよろりと長い体は蜘蛛を彷彿とさせる。

「私は同じく法審の暮田 嘘嘘です。ちなみに百笑はこの間法審に入つたばかりの新人なので、あなたに粗相をするかも知れません。悪しからず」

「ちょっと聞きたい事があるの。んで、少しだけ逆崎くんを拘束して尋問させてもらつよ」

「抵抗したら？」

「そうした所で逆崎くんにメリットがあるとは思えないし、思わない方がよいよ」

百笑は無表情で杖を構えた。

「分かりました。僕に答えられることなら答えますよ」

「良かった。んじゃ、付いて来て」

逆崎の連れてこられたのは女子寮であつた。魔法で姿を隠し、3人はこっそり中へ侵入した。

「ここに入って」

百笑が一室の前で立ち止ってドアを開け、その部屋へ入るよう促す。

「女子寮か。確かにここじゃ邪魔は入らんよな」

「相部屋の方が帰ってくると云うことは無いんですか？」

逆崎の質問に、百笑は「彼女はまだ授業中だからダイジョーブ」と事も無げに答えた。

部屋に入ると、甘い香りと鮮やかな部屋の色調が飛び込んできた。

暮田は「なるほど女子の部屋はこんな風なのか」と頻りに辺りを物色している。

「そこに座っていいよ、逆崎くん。2、3聞きたいことがあるの」

「ええどうぞ」

逆崎は指定されたソファーにやや前のめりで座った。

「馘 南枝について、何か知ってる？」

「あの失踪したという法審の人ですか？ 生憎、僕は彼と会ったこともありません」

「彼について、何か聞いたことは？」

「噂程度のことしか…」

百笑、暮田が交互に質問するが、虚を掴むような手ごたえである。

「傘路教官の事件のことは何か知っているか？」

「いえ、それも噂程度です。傘路教官は以前D r・眼鏡橋の学術論文をコテンパンに批判して、二人の間には確執があったと聞いています。それで入学式の日、D r・眼鏡橋が北条さんを洗脳して傘路教官を殺害させた、と。先日D r・眼鏡橋が自殺したのはこれらの事件を悔恨して、と聞きましたよ」

「それ以外で知ってることは？」

「…いえ。お力になれそうもありません」

「じゃあこれには答えてもらうよ」

百笑は、威圧するように怖い顔をして逆崎に迫った。あの日の夜以来、百笑は休んでいなかった。

「——逆崎くん、あなたは一体何者？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4356q/>

『T』と『F』の魔法理論

2011年10月7日03時20分発行